

か頸を締め付けられたやうで、息が出来なくなつてゐたのだ。
お前の事などはまるで考へなかつた。それからこの窓の所へ
来てゐたら、好くなつたのだ。」

三十

199

女は急いで着物を着て、窓を締めた。外には厭な風が吹き出
してゐて、見てゐるうちに空が灰色になつて、細かい雨が降つ
て来て、厭にしめつぽい空気を吹き込んで来たからである。夏
の夜の快さが、忽ち消え失せて、灰色の、物悲しい景色になつ
た。夜の明方になつて、急に秋が来て、美しい幻の影を破つて
しまつたのである。

男は落ち着いてゐる。「なぜお前そんな心配げな目附をしてゐるのだい。なんでもないぢやないか。丈夫な時だつて、夢に魘はれて飛び起きる事はあるからなあ。」

女は中々安心しない。「ねえ、あなた、御一しよにキインへ歸らうではありませんか。」

「だがなあ。」

「どうせもう夏はおしまひになつたのですもの。あの外の様子を御覧なさい。如何にも寂れて、悲しげになつてゐるではありませんか。それに寒くなると、お體の爲めにも悪いでせう。」

男は黙つて聞いてゐる。そして丁度草臥た回復期の患者のや

うに、一種の好い心持ちのしてゐるのを、自分ながら不思議に思つてゐる。呼吸は樂である。自分を包围してゐる、一種の疲れた空氣が、眠りを催すやうな甘味を感じさせる。併しこの土地を立つのが好からうといふ事だけは、自分にも分つてゐる。居所の變るのは、なんとなく愉快なやうにも思はれる。冷たい雨の降つてゐる日に、汽車の中に寝轉んで、頭を女の胸に寄せ掛けてゐるのは、好い心持ちだらうと想像して見る。「好いや。立つ事にしよう。」

「けふでも好いでせうか。」

「好いとも。お前の都合が好いなら、正午の急行で立つても好

い。

「お疲れが出はしませうまいか。」

「なんの詰まらない。草臥る程の旅ではないぢやないか。それにお前が萬事旨く世話をしてくれるだらうから。」

思ひの外容易く、男が立たうといふので、女は喜んだ。直ぐに荷物を片付ける。宿屋の勘定をする。馬車を呼びに遣る。電話で停車場へ言つて遣つて、借切りの室を取る。その内男も着物を着替へたが、部屋より外へは出ないで、午になるまで長椅子の上に寝轉んで、折々微笑んだ。その間々にはうとうとしてゐた。そんな風に半分眠つたやうになつて、折々女の方を見て

は、心の内に嬉しく思つた。この女はいつまでも己に付いてゐるのだ。それから死ぬる時も一しよに死ぬるのだと思つて見るのである。「もう近い内だ。」聲に出さずにかうつぶやいたが、心の底にはそんなに早く死ぬるやうには思はなかつた。

208

その日の午後には、午前には想像した様に、男は汽車の中で、樂に横になつて頭を女の胸にもたせて、足の上にはシヨオルを擴げて掛けてゐた。鎖してある汽車の窓から外を見れば、空は鼠色で、細かい雨が降つてゐる。立ち籠めてゐる霧の中を見込ひと、時々岡や村が近い所に見える。電信柱が背後へ走つて行

く。電線が高くなつたり低くなつたり、跳るやうにして跡へ消えて行く。折々停車場で列車が留まるが、寝てゐるのでブラツトフォオムに立つてゐる人は見えない。人の足音や話聲や、鐸の音や、相圖の笛が聞える丈である。最初は女に新聞を読ませて聞いたが、聲が嘎れて來たので止めさせた。二人とも都の住ひへ歸るのが嬉しかつた。

三十一

205

晩になつた。雨は相變らず降つてゐる。男は考へを極めやうと思つて見たが、どうも輪廓がぼやけて來て、思想が纏まらな。兎に角こんな事を考へた。こゝに大病になつた人間が寝てゐる。そいつは夏の間山地にゐるのが好いといふので、そこへ行つてゐたのだ。その側に女がゐる。女は長い間誠實に看病をしてくれた。併し今はもう倦んでゐる。大層女の顔が蒼く見え

る。併しこれは明りのせいかも知れない。さうだ。もう明りが
 點いてゐる。外は眞つ暗だ。もう秋だな。秋といふものは静か
 に物悲しいものだ。今夜はいつもの住ひの部屋へ歸るのだ。あ
 の部屋に這入つて見たら、元のやうで、一旦そこを出て山にな
 んぞ行てゐなかつたのも同じであらう。女は眠つてゐるな。こ
 んな時は眠つてゐて、物を言つてくれない方が好い。あの唱歌
 會の連中がこの汽車に乗つてゐるだらうか。己は草臥れてはゐ
 るが、病氣なやうではない。この列車には己よりひどい病氣に
 なつてゐるものが幾らもゐるだらう。ああ。ひつそりして好い
 なあ。一體けふ一日はどうして暮しただらうか。あのザルツプ

ルとの宿屋の長椅子に寝てゐたのはけふだつけな。あれからは
 もう大分時が立つてゐるやうだ。時間と空間が。一體分らない
 ものだ。世界の謎か。そんなものも、死んで見たら解釋が付く
 かも知れない。なんだか耳に旋律が聞えて來た。あれは進行し
 てゐる列車の音だ。その癖それが旋律のやうでならない。どこ
 かの民謡だな。ロシアのだらうか。單調で、しかも好い感じだ
 な。

「もしあなた。」

「なんだい。」男は自分の前に來て、立つてゐて、頬を撫で、く
 れる女を見た。

「好くお休みになつて。」

「なにを言ひに来たのだい。」

「もう十五分で着きますよ。」

「嘘のやうだなあ。」

「まあ大層好くお休みになつたやうね。きつとお體の爲めに好いのだわ。」

女は荷物を纏めてゐる。列車は相變らず闇を穿つて走つてゐる。二三分毎に汽笛の音が聞える。窓硝子を通して、ぱつと明るくなつて、直又消える火の光が見える。列車が都近くの停車場を通過するのである。

男は起き直つて、「あんまり長く横になつてゐたものだから、却て草臥た」と云つて、腰掛の隅に座つて、窓の外を見てゐる。もう遙か向うに明りの點いたキインの町が見える。列車は速度をゆるめてゐる。女は窓を開けて、體を前屈みにして外を見てゐる。車がホオルに這入つた。女は手招きをした。そして男の方へ向いて、「來て入らつしやいますわ」と云つた。

「誰が。」

「アルフレットさんですわ。」

「さうか。」

女は又手招きをした。男は立ち上がつて、女の肩越しに、プ

ラットフオオムを見た。成程友達の醫學士が窓に近づいて来た。マリイと握手した。それからフェリックスにかう云つた。「歸つて来たね。」

「どうして来てくれたのだい。」

女は急に詞を挟んだ。「わたくしが電報でお知らせ申しましたの。」

學士が云つた。「君はひどいよ。手紙なんといふものは書かない流義と見えるね。まあ、爲方がない。さあ、出て來給へよ。」
「僕はあんまり長く眠つたもんだから、まだ頭がぼんやりしてゐる。」フェリックスは、車室から降りながらよろめいたので、

かう云つて微笑んだ。

學士は病人の肘をつかまへた。さうすると女が、いつものやうに肘に縋ると見せて、片々の肘をつかまへた。

學士が云つた。「二人とも随分草臥てゐるだらうね。」

「わたくし本當にがっかりしてゐますの。」女はかう云つて、それからフェリックスの方に向いて。「ねえ、あなた、汽車旅は随分疲れるものでございませぬね。」

一同ゆるゆる停車場の石段を降りた。その間女は學士と目を見合せようとするのを、學士は除けるやうにしてゐた。

石段を降りて、學士は馬車を呼んだ。そしてフェリックスに

かう云つた。「まあ、君が無事で歸つたのを見て安心したよ。又あすの朝君の所へ行くからね。」

「僕はぼんやりしてゐる」とフェリックスは繰り返した。それから馬車に乗らうとするのを、學士が手を出して助けさうにしたので、「そんなに意氣地がなくなつてはゐないよ」と云つて、一人で車に乗つた。續いて女が乗るのを、手を貸して乗せた。

三十二

女は車の窓から手を出して、學士と握手をして、「そんならあしたどうぞ」と云つた。

その女の目附が如何にも心配げなので、學士はわざと微笑んだ。「あした早く行つて、君方と一しよに朝食を食べよう。」

馬車は停車場を離れた。學士は眞面目な顔をして、暫く見送つてゐて、「氣の毒だなあ」と獨言を云つた。

翌朝醫學士が急いでフェリックスの住ひへ来て見ると、マリイが戸口に待ち受けてゐた。「ちよつとお話しがございますの。」
「まあ、先きへわたしに診察をさせて下さい。その上でお話しをした方が、都合が好さうに思ふのですから。」

「いゝえ。唯一つ申して置きたい事があるのです。あの方の體がどんなになつてゐても、どうぞそれを言つて聞かせないで下さいまし。」

「なに。そんなに心配しなくつても好いのですよ。それ程悪くなつてはゐますまいから。まだ寐てゐますか。」

「いゝえ。もう目を覺してゐるのです。」

「昨晚どうでした。」

「さやうでございますね。午前四時頃まで、ぐつすり寐て、それから好く寐られなかつたのです。」

「まあ、わたしが診察をする間は、あなたははづして下さい。あなたが機嫌を好くして、あの男の氣分を引き立たせて遣らなくては行けないのです。ですからちよいとの間避けてゐて、わたくしに任せて置いて下さい。」かう云つて微笑みながら握手して、一人寢間へ這入つて行つた。

フェリックスは着布団を腮のところまで掛けて寝てゐて、友

達の這入つて來たのを見て、合點々々をした。

學士は寢臺の縁に腰を掛けて云つた。「内へ歸つて安心しただらうね。大ぶ様子が好いやうだから、持病のメランコリーなんぞは山に置いて來たのだらうね。」

「まあ、そんなものさ。」フェリックスは眞面目で云つた。

「君、ちよいと座つて見ないか。こんなに僕が早く來たのは、醫者として職務を盡しに來たのだからね。」

「さあ、見てくれ給へ。」フェリックスは平氣な様子で診察を受けた。

診察が済んでから、學士は二つ三つ何か問うて、返事を聞い

て、かう云つた。「まあ、この位なら満足しなくてはならないね。」

「おい。もう狂言はよしてくれ給へ。」かういふフェリックスの顔は不機嫌であつた。

「君こそそんな馬鹿げた様子ををするのをよし給へ。兎に角眞面目に病氣と闘はなくてはならないのだ。君の方では健康にならうといふ意志を堅固にしてゐなくては行けない。成行き次第だなんぞといふ料簡になられては困るよ。そんな態度は、第一君の柄になら。」

「そんならどうすれば好いといふのだい。」

「先づ二三日はさうしてゐて、起きないのだね。」

「そんな事か。君が言はなくても僕は起きたくないのだ。」
「それは丁度好いといふものだね。」

フエリックスは少し調子付いて来て、かう云つた。「唯一つ僕には分らない事があるよ。それはきのふの始末だ。君、分かるなら説明してくれ給へ。どうも僕には何もかも夢のやうだがね。汽車で歸つて来たのも、停車場に着いたのも、この寢床に這入つたのも。」

「それになんの不思議があるものか。君だつて人間以上の力は持つてゐない。誰でも草臥切つた時はそんな事があるものだ。」
「いや。さうでないよ。きのふのやうな疲れやうはこれまで無

かつた。けふだつて僕は疲れてゐるが、頭ははつきりしてゐる。實はきのふの方が却つて愉快であつたのだ。併しそれを今から思つて見ると、氣味が悪くなるね。又あんな風になるだらうかと思ふと。」

三十三

かう云つてゐるところへ女が這入つて來たので、フェリック
スが女に言つた。「おい。アルフレット君に禮を言つてくれ。お
前は看護婦を仰付けられたのだ。なんでも己はけふからはかう
遣つて寝てゐなくてはならないのださうだ。まあ、これが己の
死ぬる寢床なのだから、その積りでゐて貰はうか。」
女がひどくつらさうな顔をして聞いてゐるので學士が云つた。

221

「馬鹿を言ふのを眞面目で聞いては行けませんよ。只二三日か
うして寝てゐるが好いと、わたしが云つたのです。亂暴に起き
ないやうに、あなたは氣を付けて下されば好いのです。」
「ふん。君は知るまいが、僕に付いてゐてくれるこの女は、大
した天使だぜ。」フェリックスは皮肉な調子で女を褒めた。
學士は色々養生の爲方を話して、女に監督を頼んだ。それか
らフェリックスに言つた。「そこで君にけふ約束をして置くよ。
僕は隔日に醫者として見舞ひに來る。それで澤山なのだ。その
外の日に來た時、病氣の事を言ひつこなしだよ。僕はいつもの
通り、友達として話しに來るのだからね。」

「いやはや。君は豪い心理學者だよ。併しそんなけれんは外の病人に遣つて見せ給へ。そんなあさはかな手には、僕は乗らな
いからね。」

「困るね。僕は男子が男子に話しをする積りで言つてゐるのだ。好く聞き給へよ。成程、君は病氣だ。併し旨く攝生をすれば直す事の出来るのも事實だ。僕は何も加減をして物を言ふのではない。」かう云つて置いて、學士は立ち上がった。

フエリックスは疑ひ深い目附をして、學士を見送つた。「まるで本當の事を言つてゐるやうに見えるから可笑しい。」
「信ぜないのは君の勝手だよ。」學士は手短にかう云つた。

「今のは拙かつたね。大病人に荒い詞を使つて氣を引き立てる
なんといふのは、古い手だ。」

「そんならあした来るよ。」學士は戸の方へ歩いて行つた。そして女が付いて出さうにしたので、「ゐなくては行けません」と、命令するやうに叫びた。

女は學士の出で行つた跡の戸を締めた。それから顔に微笑を見せて、縫物を取り出して、卓の側へ寄つた。

フエリックスは女の様子を見てゐて、かう云つた。「おい。こ
こへ来ないか。さうだ。お前は大した親切な女だね。」この優し
げな詞を、苦々しい、鋭い調子で云つたのである。

歸つてから暫くの間はマリイはフエリックスの床の側を離れず
 にゐて、親切に看病した。その間女の様子は、落ち着いて、
 わざとらしくなく晴やかに見えてゐた。勿論病人の氣を落ち着
 けるやうにと心掛けてゐるのである。又實際時々病人もそれ
 を見て心持ちを好くしてゐた。併しその反對に、女の落ち着い
 た様子に反感を起す事もある。何か今新聞で見た事を話したり、
 病人の様子が好く見えると云つたり、病氣が直つたらどんな生
 活をして見ようと云つたりする時、フエリックスは不機嫌にな
 つて、「どうぞもう己に構はないでゐてくれ」といふ事もある。

醫學士は毎日來た。一日に二度來る事もあつた。併し友達の
 體の事などは少しも話さない。兩方で知つてゐる人の噂をし
 り、病院で見て來た話しをしたりする。稀には美術文學の話し
 もする。そして成るだけ病人に多く物を言はせないやうに力め
 てゐる。そんな風に戀人と友達とで、病人を氣樂にならせよう
 としてゐるので、病人も體の好くなる時が來るだらうかと思は
 ずにはゐられないやうになる事がある。重い病人に對して、側
 にゐるものがこんな狂言をするものだといふ事は、無論病人の
 心に分つてゐる。狂言だ狂言だと思ひながら一しよになつて話
 してゐる。併しその内にいつとなく引き入れられて、自分がま

だ何年も生きてゐる筈と思ふらしい詞が、自分の口から出る事がある。

三十四

さういふ時は病人は反省して、死に掛かつた病人といふものは、却つて気分が好くなつて、健康になる夢を見るものだといふ話しを思ひ出す。それからその道理から推して、自分の気が鬱したり、心配が起つて來たりするのを、却つて気分的好いよりは有望な徴候だと思ふやうになる。さてそんな論理は餘り間違つてゐると思ふので、とうとう病氣の未來などといふものは

知れないものだ、たしかめられないものだといふ結論に到着する。

・フエリックスは又本を読み出した。もう小説は面白くなく、読む内に厭きて来て、就中作中の人物が榮華をしたり、色々に活動するのを見ると、癢に障つて来るのである。そこで哲學書を読む事にして、マリイに言ひ付けて、本箱からシヨペンハウエルとニイチエとを出させた。暫く讀んでゐる内は、その説いてゐる道理から平和を見出す事も出来た。併しそれが長くは續かなかつた。

或る晩醫學士が來た時、病人は丁度シヨペンハウエルの一卷

を布團の上に伏せて、厭な顔をして空を見てゐた。側には女が手爲事をしてゐた。

「君、僕は又小説の方を讀まうと思ふ。」病人は學士の顔を見て、激したやうな調子でかう云つた。

「どうしたのだ。」

「小説なら、兎に角嘘だといふ事を白状して書いてゐるのだ。立派な詩人が上手に書いたのでも、下手な素人が拙く書いたのでも、それだけは同じ事だ。それと違つて、この先生などは氣取つてゐるのだ。」かう云つて伏せてゐる本の方を見た。

「いやはや。」

病人は床の上で起き上がった。「哲學者なんといふ奴は、自分が神のやうに丈夫でゐて、人生を厭ふだの、平氣で死を待つてゐるだのといふのだ。さういひながらイタリアで散歩をしてゐて、賑かな生活に身の周圍を取り巻かれてゐるのだ。僕はさういふのを氣取つてゐるといふのだ。そんな先生を部屋の中へ閉ぢ込めて熱を出させて、息苦しくして遣つて、お前は來年の一月一日から二月一日までの間に土の下に埋られるのだといつて聞かせて、其上でどんな哲學を説き出すか、聞いて遣りたい。」

「よし給へ。そんなバラドックスな洒落は。」

「君には分らないよ。分る筈がない。僕は讀んでゐると胸が悪

くなる。みんな氣取りやだ。」

「そんならソクラテスなんぞはどうだ。」

「あいつも狂言をしてゐた奴だ。あたりまへの人間なら、未知の事物に對しては、恐怖を感じなくてはならない。盲く行つたところで、その恐怖を隠してゐるに過ぎない。僕は正直な話をするがね、一體これまで歴史に書いてある臨終の心理といふものは皆偽物だ。それは人に名を知られてゐる、歴史上の人物は、後世の人の爲めに、狂言をしなくてはならない義務があるやうに思つてゐたからだ。僕なんぞでさへさうだ。僕が何をしてゐると思ふ。かうして、もう僕に對してなんの利害得失をも有せ

ない事柄を、君なんぞと話してゐるのも、可笑しいぢやないか。これはなんといふものだらう。」

「もうよせよせ。殊にそんな無意味な事をいふものぢやないよ。」

三十五

「僕だつて矢張り狂言をする義務を有してゐるやうに思つて、こんな事を饒舌るので、實際を言つて見れば普通の人間の夢にも知らない、非常な恐怖に僕は襲はれてゐるのだ。それと同じ事で、英雄だつて、哲學者だつて、恐怖してゐたには相違ない。只あいつらは狂言が上手だつたのだ。」

「もうおよしなさいよ」と女が頼むやうに云つた。

「大方お前なんぞも、アルフレット君と同じやうに、平氣で死を向うに見る事が出来ると思つてゐるのだらう。それは死といふものを知らないからだ。犯罪者になつて死刑の宣告を受けて見るが好い。それか、己のやうな體になつて見るが好い。その上でなくては話しは出来ないのだ。盗坊は平氣な顔で絞首臺へ連れて行かれる。大哲學者は毒藥を呑んでから、旨い文句を考へる。革命を起して、失敗した英雄は、銃の先を胸に突き付けられて笑ふ。さういふのはみんなごまかしだ。己には好く分かつてゐる。平氣を装つたり、笑つたりするのは氣取るのだ。なぜといふに死に對しては非常な恐怖を抱いてゐるに相違ないか

らだ。死の恐怖は死そのものと同じやうに、自然の現象だ。」
 學士は靜かに寢臺の縁に腰を掛けて聞いてゐた。そして病人が饒舌り止んだ時から云つた。「第一君そんなに長く饒舌つては行けない。殊にそんな大きい聲を出しては行けない。それから君のいふ事は飽くまで馬鹿げてゐる。それはひどいヒポコンドリイといふものだ。」
 「それにあなたけふなんぞはそんなに御様子が好いぢやありませんか」と女が口を出した。
 「君、ほんとにあんな事を思つてゐるのだらうか」と、病人は學士に向いて云つた。「どうだらう。こいつに君が本當の事を言

つて聞かせてくれたら。」

「ところがほんとの事を言つて聞かせなくてはならないのは、マリイさんぢやなくつて、君なのだ。併し君は何を言つたつて、けふは聞きさうでないから、僕は止めにして置く。まあ、二三日立つて、その間今のやうな長演説を慎んでゐる事が出来たら、君も起きられるやうになるだらう。その上で君にしつかり言つて聞かせる事があるよ。」

「ふん。どうも君の腹の中がこんなに見え透かないといふのだがなあ。」

學士は「もう好いよ」と云つて置いて、女の方に向いた。「あ

なたもそんな困つたやうな顔をしてゐないが好いのです。この先生だつて今に物の分かる時も来るでせう。それはさうと、なぜ窓が一つも明けてないのですね。外はひどく好い秋日和ではありませんか。」

女は立つて窓を明けた。丁度日の暮れ掛かる時である。外から吹き入れて来る風が如何にも好い心持ちなので、女は暫くその風に吹かれてゐたいやうに思つた。そこで窓の側に立ち留まつて、頭を外へ出して見た。その時女の心持ちは、病室を出てしまつて外に一人であるやうであつた。もう何日もこんな好い心持ちのした事はない。それから頭を引つ込めると、病室の、

れ許りではない。何事も考へるのが厭である。過去の事も思はず、未来の事も思はずに、何時間もぼんやりしてゐる事があつた。目を大きく明いて空を見詰めて坐つてゐる。唯外から氣持ちの悪い風が這入つて、自分の額を吹いてくれれば、それで満足に思つてゐる。その内病人がうめくので驚いて見に行くのである。併し自分の病人に對する同情が次第に薄らいで来る。憐憫が變じて神経過敏になつて、苦痛が變じて恐怖と冷淡との混合物になつて来る。併し自分が悪い人になつたとは思はれない。いつか學士が、あなたは天使のやうだと云つたが、さういふ褒詞を受けて恥ぢなくてはならないやうな氣はしない。今のやう

に冷淡に傾いて來たのは、それは疲れたのである。極端に疲れたのである。もう外へ出なくなつてから十日以上になる。なぜ出ずにゐるのだらうと考へて見る。さうすると病人をおこらせまいと思つて出ないのだといふ事が、新しい發明のやうに心に浮ぶ。無論側にゐるのがつらいとは思はない。あの人を愛してゐる事も決して昔に劣らない。唯自分は疲れたのだ。それも無理ではない。かう思つてゐる内に、外へ出たいといふ要求が次第に切になつて来る。これを無理に我慢してゐるのは、子供らしい事ではないか。病人だつて少し考へて見たら分かるさうなものである。一體もし病人がおこりはすまいかと思つて、こん

鈍い空気が顔を撲つて胸が詰まるやうな気がした。見れば病人と學士とで何か言つてゐるが、詞は聞えない。併しそれを聞きたくも思はなかつた。そこで又頭を窓から外へ出した。往來は人けが絶えてひつそりしてゐる。近い大通りから馬車の通る音が微に聞えるばかりである。その内窓の下の人道を散歩する人がちらほら通る。向ひの家の門口には、女中が二三人出て、何か話して笑つてゐる。向ひの家の窓が明いて、若い上さんが、自分と同じやうに顔を出して外を見る。マリイはそれを見て、なぜあのお上さんは散歩に出ないのだらうと思つた。そしてどの人もどの人も自分よりは幸福な様に思つて羨ましがつた。

三十六

爽かな九月の天氣が來た。日は早く暮れるが、風もなく、寒くもない。

マリイは隙があると、病人の側を離れて、開けた窓の前に椅子を据ゑてゐるのが癖になる。殊に病人の眠つてゐる間は、何時間もさうしてゐる。なんだかがつかりしたやうで自分の境遇がどんなものだといふ事を、はつきり考へるのが厭である。そ

れ許りではない。何事をも考へるのが厭である。過去の事も思はず、未来の事も思はずに、何時間もぼんやりしてゐる事があつた。目を大きく明いて空を見詰めて坐つてゐる。唯外から氣持の悪い風が這入つて、自分の額を吹いてくれれば、それで満足に思つてゐる。その内病人がうめくので驚いて見に行くのである。併し自分の病人に對する同情が次第に薄らいで来る。憐憫が變じて神経過敏になつて、苦痛が變じて恐怖と冷淡との混合物になつて来る。併し自分が悪い人になつたとは思はれない。いつか學士が、あなたは天使のやうだと云つたが、さういふ褒詞を受けて恥ぢなくてはならないやうな氣はしない。今のやう

に冷淡に傾いて來たのは、それは疲れたのである。極端に疲れたのである。もう外へ出なくなつてから十日以上になる。なぜ出ずにゐるのだらうと考へて見る。さうすると病人をおこらせまいと思つて出ないのだといふ事が、新しい發明のやうに心に浮ぶ。無論側にゐるのがつらいとは思はない。あの人を愛してゐる事も決して昔に劣らない。唯自分は疲れたのだ。それも無理ではない。かう思つてゐる内に、外へ出たいといふ要求が次第に切になつて来る。これを無理に我慢してゐるのは、子供らしい事ではないか。病人だつて少し考へて見たら分りさうなものである。一體もし病人がおこりはすまいかと思つて、こん

なに久しく出でぬたのは、随分病人の爲めに盡してぬたといふものではあるまいか。自分が病人を深く愛してゐる證據ではあるまいか。

女はこんな事を考へてゐる内に、手に持つてゐた縫物を床の上に取り落してちよいと寢臺の方を見た。もう寢臺のあたりは薄暗くなつてゐる。けふは病人も落ち着いてゐる。今眠つたところである。こんな時にそつと出て行つたら、病人は知らずにゐるだらう。ちよいとあの梯子を下りて、あの町の角を回れば賑やかな公園に出られる。それからあの都の中心を輪なりに繞つてゐる大通りに出て、電燈の澤山點いてゐる、オペラ座の前を

通る。あの邊はいつも賑かである。その賑かさが如何にも戀しい。併しそんな事が出来るのはいつだらう。無論病人が直つてしまへば出来るだらう。あの人が病氣でゐては、往來や、公園や、大勢の人を見たつて詰まらない。

女はとうとう出でぬた。さうして寢臺の側へ椅子を持つて行つて病人の手をつかまへて涙を拭いた。その涙は、もう側にゐる男の事を考へなくなつても止まらなかつた。

その日の午後であつた。學士が来て見ると、病人がこの頃になく好い血色をしてゐた。それを見て學士が云つた。「この鹽梅

だと、もう二三日立つてから起きられさうだね。」

「さうかね」と病人は云つたが、何事に依らず友達と言ふ事を猜疑の耳を持つて聞く癖が付いてゐるので、嬉しくも思はなかつた。

學士は、卓の側にゐるマリイに向いて云つた。「あなたも少し血色が好くつても好いね。」

その詞を聞いて、病人も女の顔を見たが、成程目立つて色が悪い。一體この頃病人は、女の親切を感謝したいやうな心持ちになると、わざとその心持ちを排斥する癖が付いてゐる。女の犠牲的精神が幾分か偽物らしく思はれて、その忍耐の表情が白

白しく思はれたのである。そこで女が「その事じれつたがつて来れば好いと思ふ。いつか詞か科で、女が薄情な根性を曝露したら、その時面と向つてさう云つて遣りたい。もう疾うからお前が面を被つてゐるといふ事は知つてゐた。己は胸が悪かつた。どうぞ己の側を退いて己に落ち着いて死なせてくれと云つて遣りたい。」

女は學士の詞を聞いて、少し顔を赤くして微笑んだ。「おたくしちつとも弱りなんかしてゐませんわ。」

三十七

「いや。さうでありませんよ。フェリックス君だつて、自分が直つて、あなたが病氣になつては困るでせう。」かう云ひながら、學士は女の側へ歩いて行つた。

「だつてわたくし本當になんともないのでございますもの。」
「一體あなたはちつとも外へ出ないのでですか。」
「出たくなんざありませんもの。」

「おい。フェリックス君。マリイさんはまるで君の側を離れつこなしだ」と云ふぜ。」

「さうだらう。御承知の通り天使だからね。」病人は平氣でかう云つた。

「併しね、マリイさん、それはあまり馬鹿げてゐますよ。そんなにして無駄な骨を折るのは、子供らしくて、なんの用にも立ちません。是非折々は外へお出なさい。わたしがその必要を言明しますね。」

女はかすかに微笑んだ。「なぜそんなに仰やいますの。出たくなけりやあ好いちやありませんか。」

「それは出たくても出たくなくても同じ事です。一體その出た
くないといふのが、もう悪徴候です。是非けふは出なくては行
けません。そして一時間許り公園のベンチに腰を掛けてお出で
なさい。それとも厭なら、馬車を雇つてブラアテルあたりへで
も行つてお出でなさい。あの邊はこの頃面白い時節ですから。」
「でも。」

「でもなんぞと云つたつて駄目です。そんな風に續いて遣つて
ゐて、餘り天使になり澄すと、體が臺なしになりますよ。まあ、
ちよつとその鏡で顔を御覧なさい。實際大變な事になるので
す。」

學士がかう云つた時、病人はちよいと胸を衝かれたやうな心
持ちがした。抑へた怒が腹の中を掻き交せてゐる。なんだかこ
の會話をしてゐる時、マリイの顔に、人の憐みを乞ふやうな、
自覺したる忍耐の表情が見えたやうに、病人は感じた。そして
動かすべからざる眞理でもあるやうに、この女は己と一しよ
に苦勞すべき筈、己と一しよに死ぬべき筈の女だといふ思想が、
頭の中をひらめき過ぎた。女が體を臺なしにする。無論それで
好いぢやないか。己が死に向つて進んで行くのに、あいつが薄
赤い顔をして目を赫かしてゐなくてはならないといふのだらう
か。一體アルフレットだつて女がさうすべきだと思ふのだらう

か。それとも女までが自分にそんな考へを。

學士がさつき云つた事を繰り返して、女に勸めてゐる間、病人は女の顔の表情を一しよ懸命覗つてゐた。とうとう學士は女に承諾させた。それはけふの内に外へ出るといふのであつた。學士に言はせると外へ出るのも、看病すると同じやうに、女の病人に對して盡すべき義務の一つなのである。

「あんな事を言つてゐるのは、己といふものを度外視してゐるのだ。どうせ直らない病人だといふので、構はずに死なせる氣なのだ。病人はかう思つた。そして學士が歸つて行く時、ひどく冷淡に握手をした。心のうちに學士を憎んでゐるのである。

女は學士を部屋の入口まで送つた切りで、直に病人の所へ歸つて來た。病人は唇を堅く閉ぢて、額に深い怒りの皺を寄せてゐた。その心持ちがマリイには分つた、底から好く分つた。そして男の上へ身を屈めて微笑んだ。男は溜息を衝いた。それから何か言はうとした。何か非常な侮辱を靚面に與へて遣りたいのである。さうするのが當然だと考へられるのである。女は優しく男の髪を撫でて遣つて、顔には忍耐に慣れた、疲れた微笑を續けて、口を側に寄せて、親切に呶いた。「わたくし行かなくつてよ。」

男は黙つてゐた。その晩は夜の更けるまで、病人の側に坐つ

てゐて、女はとうとう椅子に掛けたまゝ、眠つてしまつた。

翌日學士が來た時、女は話しをしないやうに避けてゐた。併し學士はけふは女の顔なんぞに構はない様子で病人とばかり話しをしてゐた。

學士はもう程なく起きて好いといふ事を、けふに限つて言はずにゐる。病人もそれを問ふ事を憚つてゐる。一體病人は、けふは物が言ひたくない。いつもになく口不性である。そして學士が暇乞ひをして歸るのを、嬉しく思つた。

三十八

病人は女にも不機嫌な、短い返事ばかりしてゐる。午後になつて何時間も黙つてゐた跡で女が問うた。「けふは御氣分はどんなのですの。」

「どうだつて好いぢやないか。」病人は兩手を頭の上で組合せて、目を瞑つて寐入つてしまつた。

女は暫く側で病人の様子を見てゐた。その内頭がぼんやりし

て、夢見心地になつて来た。

暫くして女がふと心付くと、好く寝た跡のやうに爽快な感じが體中に漲つてゐた。女は立ち上がつて、卸してあつた窓掛を巻き上げた。なんだか近い公園から、遅れ咲きの花の香が、この狭い町へ迷ひ込んで来たやうで、部屋に這入つて来る空氣に、いつにない美しい匂がある。女は病人の方を振り返つた。病人はさつきと同じやうに寐てゐて、呼吸も静かである。これまではこんな時に、女はきつと一種の感動を起して、この部屋を離れる氣にならずに、鈍い沈んだ心持に體を任せてゐたのである。それがけふはなんにも感ぜない。そして病人の眠つてゐるのを

喜んで、心の内に何の争鬭をも起さずに、いつも平氣でする事でもあるやうに、一時間外へ出て来ようといふ決心をした。女は足を爪立てて臺所へ出て、女中に病室へ行つてゐるやうに差圖した。それから帽子と蝙蝠傘とを持つて、飛ぶやうに梯子段を降りた。

女は往來へ出た。足早に狭い町を二つ三つ通り過ぎると、公園である。兩側に大きい木や小さい木が植わつてゐて、頭の上には薄青い空がひろがつてゐる。何もかも久しく戀しく思つてゐた景物ばかりである。

女はベンチに腰を掛けた。同じベンチにも、近所にある外の

ベンチにも乳母や子守が掛けてゐる。並木の下では子供が遊んでゐる。その内次第に暗くなつて來るので、もう遊びも末になつたと見えて、女達はそれぞれ子供を呼んで、手を引いて公園へ出て行つた。とうとうマリイは一人になつた。ちらほら人が通り過ぎる。男の中には、ちよつと振り返つてマリイを見て行くものもある。

とうとう外へ來たのである。一體どうしたといふのだらう。丁度かういふ時、人に邪魔をせられずに、自分の現在の地位を見渡して、好く考へて見なくてはならないと、女は思つた。自分の思想を、はつきりした詞に直して、口の内で言つて見たい

のである。

わたしがあの人の側にゐるのは、あの人を愛してゐるからである。側にゐなくては氣が濟まないから側にゐるのだ。さうして見れば犠牲になつてゐるといふものではない。さてこれからどうなるのだらう。いつまでこれが續くだらうか。どうせあの人は助からない。併し末はどうなるのだらう。いつかあの人と一しよに死なうと思つた事もある。それになぜ今はこんなに餘所餘所しくなつてゐるのだらう。

どうもあの人は自分の事ばかり思つてゐるやうだ。今でもわたしと一しよに死にたいのだらうか。かう思ふや否や、きつと

一しよに死ぬる積りでゐるのだといふ斷案が、はつきりと下された。併しその時の男の姿は、永遠に愛人を側に寝かしてゐたといふ優しい青年の姿ではなかつた。意地悪く、嫉み深く、一旦我物にした女だからといふので、無理に引き摩つて連れて行く人の姿が見えたのである。

その時若い男が一人来て、マリイの側に腰を掛けて何か言つた。女はうつかりして、「なんです」と問ひ返した。併し直ぐに氣が付いて、立ち上がつて、足早にそこを逃げた。

公園を歩いてゐる間、出逢ふ人の自分を見るのが不快であつた。例の輪形になつた大通りへ出て、馬車を呼んで、そこら

散歩するやうに歩くと云ひ付けた。

日が暮れた。女は馬車の隅に、樂に身を寄せて、車の心地よく滑つて行くのを喜び、夜の薄明りと、ひらめく瓦斯燈の明りとの間を出没する、種々の事物の移り變るのを眺めて楽しんだ。九月の、天氣の好い晩なので、大勢の人が散歩に出てゐるのである。

三十九

市民公園の前を通る時、中から爽かな軍樂の聲が聞えた。マリイはザルツブルヒで合奏を聞いた晩の事を思ひ出した。そしてこの周囲の事物が皆無常な無價値なもので、それを擲つて死ぬるのは、なんでもないと思つて見ようとしたが、どうもそれは出来なかつた。自分の心に沁み込んで来る心地好さを忘れようとしても、忘れられなかつた。なんだか愉快で溜まらない。

あそこには電氣燈の白く照つてゐる劇場がある。あそこには議事堂前の廣場の並木の間から、人が暢氣らしく往來を歩いて來る。あそこには咖啡店の前に大勢の人が腰を掛けてゐる。この色々な人は心配なんぞはなさうに見える。事に依つたら全く心配はないのかも知れない。柔かい、暖かい空氣が顔に當る。こんな心持の好い晩を、生きてゐて何遍でも味ふ事が出来る。その外天氣の好い夜晝を何千度でも楽しんで過す事が出来る。健康の喜びの感じが體中の脈々を流れて通る。この色々なものが總て愉快に感ぜられる。

一體永い永い間死ぬるほどの疲れに體を委ねてゐたものが、

たつた何分間かこんな樂をしてゐるのが、不都合だといふべきだらうか。自己の存在といふ事を自覺するのが、當然の權利ではないだらうか。自分は健康である。年も若い。千百の泉から一時に人生の喜が流れ出て、自分の上に注ぎ掛かつて來るのである。これは自分は呼吸をしてゐるといふ事や天が自分の上に覆つてゐるといふ事と同じやうに自然である。それを恥ぢなくてはならないだらうか。

マリイはふと病人の事を考へた。もし奇蹟があつて、あの人が直つたら、自分は無論あの人と一しよに暮すだらう。あの人の事を思へば、優しい、寛恕して遣りたい悲哀が萌して來る。

そしてもうそろそろあの人の側へ歸つて遣らなくてはならない時だらうかと思ふ。

併しあの人はわたしの側にて遣るのに満足してゐるだらうか。わたしの優しくして遣るのを、難有く思つてゐるだらうか。なんとといふ毒々しい詞使ひをこの頃はするだらう。なんとといふ憎々しい目附きでこの頃は見るだらう。それから接吻などはどうしたのだらう。もう接吻といふ事をしなくなつてから大分久しくなつてゐる。かう思ふと同時に病人の唇の蒼ざめて、いつも乾いてゐるのが思ひ出される。それから額にキスをして遣らうかと考へる。あ。額は冷たくて、いつも汗ばんでゐたつけ。

まあ、病氣といふものは厭なものだこと。
 マリイは車に背を寄せ掛けた。そして故意に病人の事を思ふまいとした。病人の事を思はないやうにするには、往來の方を熱心に見なくてはならない。かう思つていつまでも記憶して置かなくてはならないものを見るやうに、往來の事物の一つ一つに目を付けてゐた。

フェリックスは目を開いた。寢臺の側には蠟燭が一本弱い光を放つてゐる。その椅子の上に、婆あさんが手を膝に置いて冷淡な様子をして坐つてゐる。

「あいつはどこへ行つたのだ。」病人がかういふと、婆あさんはざくりとした。そして、「さつきお出掛けになりましたが、直ぐお歸りになる筈です」と答へた。

「もうあつちへお出で」と病人が云つた。それでも婆あさんはもちちしてゐるので、「行つても好いといふぢやないか、用はないのだ」とすげなく云つた。

病人は一人になつた。これまでにつひを覺えない不安が襲つて來た。

女はどこへ行つたのだらう。さう思ふと寢臺に寝てはゐられないやうな氣がして來た。併し起きて見ようとするだけの決心

も出来なかつた。

忽然こんな事が頭に浮んだ。「事に依つたらあいつは逃げたのではあるまいか。長く己を見棄て、行つてしまつたのではあるまいか。もう己の側で暮してゐるのが我慢しにくくなつたのだ。己がこはくなつたのだ。あいつは己の腹を見破つたのだ。それとも己は寢言でも云つたのではあるまいか。もう大ぶ久しい間、はつきりとは考へなかつたが、始終己の心の底には、思つてゐた事なのだから、いつかそれを聲に出して言つたかも知れない。それを聞いて、女は一しよに死にたくないと思つたのではあるまいか。

四十

思想は織るが如くに頭の内を往來する。毎晩發する熱が出て來た。「一體己はあいつに優しい詞を掛けないやうになつてから、もう大ぶ久しくなる。只それだけの事で逃げたのかも知れない。己は痲癩を起したり、猜疑の目付きで見たり、苦々しい事を云つたりした。禮を言はなくてはならないのに、そんな事をしたのだ。よしや感謝して遣らないまでも、少くも公平にだけは考

へて遣るべきであつたのだ。ああ。こゝにゐてくれ、ば好いなあ。どうもあいつがゐなくては困る。あいつがゐなくなるならうと思ふと、胸が燃えるやうに苦しい。己む事を得ないなら、どんなにもあやまつて遣りたい。これからはどんなに自分が苦しくても、一人でこらへて、言はずにゐても好い。胸が押し付けられるやうに切ないのに、微笑んでゐても好い。息が詰まつて溜らないのに、手にキスをして遣つても好い。己はむちやな夢を見るのだ、よしや夢に何か言つた事があつても、それは熱に浮されたのだと、よく言つて聞かせよう。それから己はお前を崇拜してゐるのだ。お前に成るだけ長生をさせたい、末長く

樂に暮させたいと思つてゐるのだと誓つて遣らう。どうぞ己の側にだけゐてくれ、己の寢床の側を離れてくれるな、一人で死なせてくれるなと頼まう。お前が側にゐるとさへ思へば、平和な気分で、明るい理性で死を待つ事が出来るのだと云はう。どうせ程なく死ぬるのだ、けふあすかも知れないのだ、それだから側にゐてくれなくてはならない、ゐてくれんでは心細いと云はう。あいつは一體どこにゐるのだらう。どこにゐるのだらう。頭の中で血が渦巻いてゐる。目が昏んで来る。息が忙しくなつて来る。それに誰も側にはゐない。なぜ己は婆あさんを追ひ出してしまつただらう。あれだつて人間だ。これでは己は手も足

も利かないのに一人であるのだ。」
 病人は起き上がった。そして思つたより力強く感じた。併し呼吸が如何にも苦しい。なんとも言はれないやうに切ない心持ちがする。とうとう我慢し切れなくなつて床から出た。そして着物を半分着て窓の所へ出て見た。新鮮な空気が顔に觸れる。病人は深い息を二三度した。それは好い心持ちであつた。寢臺の縁に掛けてあるシヨオルを取つて體に巻いて、椅子に腰を掛けた。それから數秒間は思想が亂れて、ぼんやりしてゐたが、又しては電光のやうに「どこにゐるのだらう、どこにゐるのだらう」といふ考へが閃き過ぎる。「今まで己が眠つてゐる間に、

出て行つた事があるのだらうか。さうかも知れない。どこへ行くのだらう。つひ一二時間病室の陰氣な空気を除けてゐる積りだらうか。それとも己の病氣を嫌つて除けるのだらうか。己の側にゐるのが厭になつたのだらうか。この部屋に漂つてゐる死の影がこはいのだらうか。生が戀しいのだらうか。生を求めるのだらうか。何を求めるのだらうか。何を思つてゐるのだらうか。どこにゐるのだらう、どこにゐるのだらう。」
 飛び翔るやうな思想が呟きになり、うめき出すやうな詞になる。そして「どこへ行つたのだらう」と叫ぶのである。女がこの部屋を逃げ出して、自由を得た喜びの微笑を唇の上に湛へて、

梯子段を駆け降りて、どこか病氣や、胸の悪い事や、ゆるゆると死んで行く有様の見えてゐないところへ、どこか、或る不明なもの、或る花咲き匂ふものゝある所へ、逃げ込んで行かうとするのが、目の前に見えて来る。女の姿は、赫く霧の中へ隠れてしまつて、其霧の中から、女の笑聲が聞える。幸福の笑聲、歡喜の笑聲である。そしてその霧が散つてしまふと、女の踊つてゐるのが見える。女はくるくる廻つて踊りながら見えなくなつてしまふ。

その時どろどろいふ音が次第に近づいて来て突然止んだ。男は「どこへ行つたのだらう」と又思つて、ふと氣が付いて窓の

所へ走つて行つた。どろどろいつたのは馬車で、それが門口に留まつてゐる。馬車ははつきり見える。そしてその中から人が出て来る。それはマリイであつた。

四十一

相違なくマリイである。出迎へようと思つて、次の間へ飛び出した。そこは真つ暗である。どこに戸の撮みがあるか見えな
い。まごまごしてゐる内に、外から鍵を挿て、錠を開けた。戸
が開いた。マリイが這入つて来た。廊下から微な瓦斯燈の光が
差し込んで、女の身の周囲を照してゐる。男がくら闇にゐたの
で、女が知らずに打つ付かつて、きやつと云つた。男はいきな

りその肩を掴んで、部屋の中へ引き摺り入れた。そして口を開
いて何か言はうとしたが、聲が出なかつた。

「あなたどうなすつたの。氣が變になつて入らつしやるぢやあ
りませんか。」

女は恐怖の餘りにかう云つて、男の手を振りほどかうとした。
男は棒立ちに立つてゐる。その様子が見る見る丈が伸びて大
きくなるやうに見える。男はやうやう物が言はれるやうになつ
た。「どこから歸つて来たのだ。どこから。」

「まあ、あなたしつかりして下さいよ。どうしてそんな。まあ、
そこへお掛けなさいよ。」

「どこから歸つて來たのだ。どこから。どこから。」男の聲は前よりは小さくなつて、茫然として言つてゐるやうに聞える。どこからを繰り返した聲は、始ど呶くやうである。

女は男の手を握つた。その手は焼けるやうに熱かつた。

女に手を引かれて、男は長椅子の所へ連れて行かれた。そして女は椅子の隅へ男を押し付けると、男は素直にそこへ坐つて、なんだか正氣にならうと努力するやうな様子で、周囲を見廻した。そして今度は、はつきりした聲で、前と同じやうに、「どこから歸つたのだ」を繰り返した。

女はやうやう落ち着いて、帽を脱いで、背後の椅子の上に投

げて、男の側へ腰を掛けた。そして媚びるやうに云つた。「わたくし、たつた一時間外に出て、風に當つて來ましたの。なんだか、自分でも病氣になりはしないかと思つたものですから。病氣にでもならうもんなら、あなたのお役にも立たないでせう。歸りには、早くお目に掛からうと思つて、馬車に乗つて歸りませう。」

男は長椅子の隅に坐つて、がっかりしたやうな様子である。そして女の顔を横から覗き込んで、なんにも言はない。

女は熱い男の頬をさすりながら、語り續けた。「ねえ、おおくりなすつたのではないでせう。それにあの女中に、わたくしの

歸つて来るまで、お側にゐるやうに云つて置きましたわ。ゐま
せんでしたか。どこへ参りましたの。」

「己があつちへ行けと云つたのだ。」

「なぜそんな事をなすつたの。あれはわたくしの歸るまで、お
側そばにゐるやうに、さう云つて置いたのではありませんか。わた
くし早くお側そばへ歸つて來たくてなりませんでしたの。幾ら空氣
が好くつたつて、あなたが入らつしやらなくつては、詰まりま
せんわ。」

男は病氣な子供のやうに、頭を女の胸に寄せ掛けた。女は昔
したやうに、男の髪に軽く接吻した。男は訴へるやうな目付で、

女を見上げた。「おい。己の側にいつまでもゐてくれなくつては
行けないぜ。」

「え、。」女は又男の濡つた亂髪に接吻した。女はなんとも云へ
ないほど悲しかつた。泣きたいやうであつた。併しその感動に
は一種の枯れた、乾燥びたやうな心持ちが交つてゐた。どこか
らも慰藉は來ない。自分の悲痛の内にも、それを見出す事が出
來ない。そして男の涙の頬を傳はつて流れるのを見て、その涙
を羨ましく思つた。

それから夜も盡も女が男の病床を離れずはなにゐる。食事を運

んで来る。薬を飲ませる。男が気分が好くて、何か聞きたいと云ふと、新聞やら、小説の一節やらを讀んで聞かせる。女の散歩に出た翌朝から雨が降り出して、いつもより早く秋が来た。窓の外を見てゐると、毎日朝から晩まで、始ど小止みなしに降る。細い、鼠色の雨の絲が見えてゐる。

四十二

この頃になつて、病人は夜折々、何やら連続のない事を言ふ事がある。そんな時には、女が機械的に、男の額や髪をさすつて遣つて、「お寐なさいよ、お寐なさいよ」と叫く。子供が夜中に不安になつた時、母が宥めるやうな工合である。見る見る男は弱つて行く。併し苦痛はひどくない。病氣の元を思ひ出させるやうな、短い間の呼吸困難が折々あるが、それが過ぎ去ると、

る。

或る日學士は、矢張りこんな事を考へて、梯子を升つて來た。戸口から這入つて見ると、女が次の間に、青い顔をして、手を組み合せて立つてゐる。「どうぞ入らつしやつて下さいまし」と云つて、女は學士を病室に案内する。學士は急いで這入つて見た。

病人は床の上に坐つてゐる。さうして憎々しい目附で二人を見て云つた。「一體己をどうしてくれるのだい。」

學士は足早に側へ寄つた。「君こそどうしたのだ。」

「いや。君が僕をどうしてくれるのか聞きたいのだ。」

「まあ、それはなんといふ馬鹿げた物の言ひやうだね。」

「君もあいつも、僕を行き着かしてしまふのだ。」病人の聲は叫ぶやうである。

學士は病人の手を握らうとしたが、病人は荒々しく自分の手を引いた。「廢してくれ給へ。マリイもそんな手附きなんぞをしてゐるには及ばない。僕は只君やあいつが、僕をどうしてくれるのだか、それが聞きたい。これからどうなるのだかそれが聞きたい。」

學士は落ち着いた聲で云つた。「君さへそんなにむちやくちやに興奮しないでゐれば、もつと早く好くなるのだ。」

「己はもう随分長い間かうして寝てばつかしめるのだ。それを二人共平気で見物してゐる。」かう云ひ掛けて病人は突然學士の方に向いた。「一體君は僕をどうしてくれるのだ。」

「まあ、そんなわけの分らない事を云ふのは廢し給へ。」

「だつて君は僕をどうもしてくれないぢやないか。もう時期は切迫してゐる。それに誰も手を出して防いではくれない。」

「まあ、氣を落ち着けなくてはね」と云つて、學士は寢臺の縁へ腰を掛けて、又病人の手を取らうとした。

「君はもう僕を見放してゐるのだね。それだからかうして寝かして置いて、モルヒネばかり飲ませてゐるのだ。」

「どうも今二三日の處は忍耐して貰はなくてはならないよ。」

四十三

「併しね、かうしてゐるのがなんの役にも立たないのだ。僕がこれからどうなるといふ事は、はつきり分かつてゐる。なぜ君は僕をこんなにしりじり衰へて行かせるのだ。君にだつて、マリイにだつて、僕がこのまゝまゐつてしまふのだといふ事は、分かつてゐるに違ひない。僕の身になつて見給へ。どうも我慢が爲切れない。どうにかして見やうがあらうぢやないか。君は

「醫者ぢやないか。考へて見てくれ給へ。どうにかしてくれるのが、君の義務だ。」

「それは手段はあるとも。」

「手段なんか、ないね。奇蹟でも現はれるなら、知らぬ事だ。」

ところが奇蹟なんぞは現はれまい。そこで僕は兎に角どこへか行かうと思ふ。」

「それは君がもう少し力付いて来れば、起きる事が出来るのだ。」

「いや。君に言ふがね、そんなことを言つてゐると、機會は過ぎ去つてしまふのだ。なぜ僕がこの厭な部屋にいつまでもゐなくてはならないのか。僕はどこかへ行きたい。この町が離れた

い。僕の體に何が必要だといふ事が、僕には分かつてゐる。僕は春に逢ひたい。僕は南の國へ行きたい。僕の頭の上に暖かい日が照つてくれれば、僕は丈夫になるのだ。」

「それは分かつてゐるよ。南の方へ行くのは無論好い。併しも少し辛抱しなくては行けないね。けふなんぞ立たうと思つたつて立たれない。あすも駄目だ。その時期が来れば、僕がさういふよ。」

「ところが僕はけふでも立たれる積だ。この厭な部屋の外へ出てさへしまへば、僕はたしかに生れ變つたやうな人間になる。この儘にしてこゝに置かれては、僕は一日一日危険を冒してゐる」といふものだ。」

「併し兎に角僕は醫者だよ。」

「それは君は醫者に相違ない。併し君は特別の場合を考へないで、どの病人をも同じやうに扱はうとするのだ。病人には自分がどうすれば好いといふ事が却つて好く分かる。僕をかう遣つて寐かして置いて、衰へさせてしまふのは、どうも好い加減な爲方で、不親切極まるのだ。南の方へ轉地して、體が不思議に好くなつたものは幾らもある。たとへ一縷の望みでもある以上は、何も手を束ねてゐるには及ばない。僕にだつてまだ望みはある。君のするやうに僕を運命の弄ぶがまゝにして置くのは、

實に冷酷極まるのだ。僕は是非南の方へ行つて見たい。春のあ
る方へ行つて見たい。」

「好いよ。それは僕だつて承認してゐるのだ。」

女は急に口を挟んだ。「ねえ、あなた、フェリックスさんとわ
たくしとで、明日立ちましても好うございませう。」

「さうですね。フェリックス君が僕に約束して、三日間動かず
にゐてくれたら、立たせる事にしませう。兎に角けふなんぞ立
たせては、僕が犯罪をするやうなものです。どうしてもそんな
事は出来ません。それにあの天気を御覧なさい。雨風です。ど
んな丈夫なものだつて、けふなんぞは旅に立たない方が好いの

です。」

「そんならあしただ」と病人が叫んだ。

「まあ、天気が少し好くなつたら、二三日の内に立つといふ事
にするのだね。」

病人は學士の顔を、ねらふやうに見た。

「きつとかね。」

「きつとだ。」

女が「それ御覧なさい」と云つた。

病人が學士に言つた。「一體君はもう僕の命は救はれないもの
だと思つてゐるのだらう。そこでこゝで死なせようと思ふのだ

らう。それは間違つた人道だよ。人間が死ぬる段になると、故郷も何もあつたものではない。生きてゐられる所が故郷だ。兎に角僕は手を束ねては死にたくないのだ。」

「まあ、好く聞き給へ。冬は南の方で送らせようと、僕が思つてゐたといふ事は、君も知つてゐなくてはならない筈だ。併しこんな天氣に旅行するものはないからね。」

四十四

病人は女に言つた。「兎に角直ぐに支度をしてくれ。女は心配げに學士の顔を見た。

「それは支度はするが好いよ。いづれいつか用に立つのだ。」學士がかう云つた。

「すつかり支度をしてくれ。己はもう一時間すると起きて、日の差して来るのを待つてゐる。日が差して來たら、直ぐ立つ。」

午後になつてフェリックスは起きた。轉地をするといふ考へが、精神上に餘程好影響を興へたらしく見える。気分がはつきりして、長椅子に寝轉んでゐる。近頃の物事に冷淡な様子もなく、絶望の發作もない。マリイの支度をするのを見て、色々な註文を言ふ。藏書の中で、何々を持つて行きたいと指圖する。一度なんぞは、自分で立つて行つて書類を一山卓の抽斗から出して、それを行李へ入れさせた。

「元から書き掛けてゐるものに、目を通して見る積りだ」と、女に言つた。それから女がその書類を行李の中へ入れようとし

てゐる時、かう云つた。「己は長らくなんにもせずにもたが、却つてそれが爲めになつたやうだ。どうも思想が成熟したかと思へ思はれる。今まで考へて置いた事が、今になつて不思議に明瞭に想像せられるやうだ。」

雨風の日の翌日天氣が直つて、その翌日は意外に暖かになつて窓が開けてゐられる位になつたのである。そこで午後になつて病人が起きた時には、愉快な、暖かい日影が床の上に落ちて、片付け物をする爲めに跳いた女の髪を打つてゐる上には、さらさらする反射が見えてゐるのである。

丁度女が書類を丁寧に行李にしまつてゐるところへ、醫學士

が来た。病人は長椅子の上に横になつてゐて、例の書き物の事を話した。

學士は微笑んだ。「それも悪いとは云はないよ。君だつて體は大切にしてゐるのだから、むやみに早く著述に掛かるやうな事もあつない。」

「なに著述といつても、勞力ではない。これまで闇の内に隠れてゐた、僕の思想の上に、新しい光線の反射が一ぱいに見えて来たやうな氣がするのだよ。」

「それは好いね。」學士はこの詞をゆつくり言つて、病人の様子を見てゐる。

病人は虚空を凝視してゐる。「君、僕を誤解しては行けないよ。思想といつても、はつきりした輪廓のあるものを持つてゐるのではない。只何かが出来さうな感じがあるばかりだからぬ。」

「さうか。」

「これまでも僕は、オルケストラが調子を合はせるのを聞くと、強い感じを受けた事がある。今に一齊に清い諧律が聞えて來るのだ。今にあらゆる樂器が正しく奏し始められるのだといふ感じだね。」かういひ掛けて突然、「汽車の室は逃へてくれたのだね」と問うた。

「取つて置かせたよ。」

「そんならあすの朝は立たれますね」と、女が機嫌よく云つた。女は忙しさに箆笥から行李へ、行李から書棚へ、書棚から又行李へと走つて、物を整頓しては詰め込んでゐる。

學士は妙な心持ちがした。なんだか面白い遊山の旅に立つて行く、若い男女を見てゐるやうに思はれるのである。けふはこの部屋中に、如何にも希望に富んでゐる、濁りのない情調が漲つてゐるのである。

學士が暇乞ひをして出る時、女が次の間まで付いて出た。「ほんとに立たれる事になつて好うございますわ。わたくし嬉しくて溜りませんの。いよいよ立つといふ事になつてからは、フエ

リックスさんが、まるで別な人のやうになつたのですもの。」

學士はなんとも答へる事が出来なくつて、只女と握手して歸りさうにしたが、振り返つて云つた。「あなたに言つて置かなくつてはならないのですが。」

「なんでございますの。」

「わたしは醫者ではあるが、同時にあなた方の友達ですからね、何か僕に用が出来て來たら、僕はいつでも出掛けて行きますよ。どうぞ忘れないで電報を打つて下さい。」

四十五

「そんな事になりますでせうか。」女は驚いたやうな顔をしてゐる。

「萬一といふ事がありますからね。」學士はかう云つて置いて歸つた。

女は暫く立ち留まつて考へてゐたが、餘り長くこゝにゐたら病人がなんとか思ひはすまいかと心配して、急いで病室へ歸つ

た。併し病人はなんの氣も付かずに、女の這入つて來るのを待ち受けて、前の話しの續きを饒舌つた。「お前は知るまいが、これまで太陽が己の體に好影響を與へた事はたびたびある。時候が段々寒くなつたら、次第に南へ行かう。リキエラへ行くのだな。それからもつと先きになつたら、アフリカへ行つても好い。どうだ。赤道直下にあるたら、己はきつと傑作を纏める事が出来る。」

いつまでも饒舌り息めないで、とうとう女が側へ行つて、男の頬をさすりながら、微笑んで云つた。「もうお廢しなさいよ。あんまり輕はずみですわ。あしたは早く起きなくてはならない

のですから、もうお寝なさいよ。」女は男の頬の赤くなつて、目の赫かいてゐるのに付が氣きいた。そして男の手を取つて長椅子ながいすから起き上がらせようとした時、男の手ての燃もえるやうに熱あついのに驚おどいた。

夜が明け掛かると直ぐにフェリックスは目を覺さした。丁度休ちやうどきゆう日に内へ歸かへる子供のやうな喜びを感じてゐる。停車場へ馬車ばしやに乗つて出掛ける筈はずの時刻より二時間も早く支度しだをしてしまつて、長椅子ながいすに掛けて待つてゐる。マリイも用が疾とつくと濟すんでゐる。鼠色ねずみいろの外套ぐわいとうを着て、帽子ぼうしを被かつて、その上に青色あおいろの面紗めんさを掛かけ

て、女は窓まどに立つてゐる。註文ちゆうもんした馬車ばしやの來きるのを早く見付みける爲ためである。大抵たいてい五分置ごふんおきき位くらいに、男おとこはもう馬車ばしやが來きはしないかと問とふ。もう男おとこはじれつたがつて外ほかの馬車ばしやを雇やとひに遣やらうかといふ時とき、「あそこに來きました」と女おんなが叫まんだ。それから「アルフレットさんも來きてよ」と女おんなが言いひ足たした。

丁度馬車ちやうどばしやと一しよに町の角かどを曲まつて來きた醫學士いがくしは、愛想好あいさうこうく二階にかいの窓まどに向むいて挨拶あいさつをした。それから程ほどなく部屋へやに這入はいつて來きた。「おや。もう二人共ふたりともそつくり支度しだが出來でてゐるね。朝食あさめしも濟すんだ様子ようすだのに、そんなに早く停車場ていしやちやうへ行いつて、どうする積せきりだね。」

「だつてフェリックスさんが、じれつたがるのですもの」と女
が云つた。

學士は病人の側へ歩み寄つた。

病人は機嫌よく微笑んで、「旅には持つて來いの天氣だ」と云
つた。

「さうさ。きつと非常に愉快な旅行になるよ。」學士はかういひ
ながら、卓の上の堅パンを一切れ取つた。「頂戴しても好いのだ
らうね。」

女は驚いた様子で云つた。「あなたまだなんにも上がらずに出
て入らつしやつたのでせうか。」

「なんにも遣らないとはいはれませんか。實はコニヤックを一
杯飲んで出ました。」

「そんならまだこの中に珈琲がありましたやうですから、どう
ぞ。」女は無理に勸めて、珈琲の残つたのを茶碗に注いで、學士
に出した。そして何か女中に言ひ付けに次の間へ出た。學士は
ゆづくり一杯の珈琲を飲んで、茶碗を口から離さずにあた。そ
れは病人と二人切りになつたので、話しをするのが厭だからで
ある。

問もなくマリイは這入つて來て、もう何もかも揃つてゐるか
ら、いつでも出掛けられるのだと云つた。

病人は立ち上がつて眞つ先きに戸口を出た。鼠色の外套を羽織り、柔かい黒の帽子を被つて、手にはステッキを持つてゐる。梯子段も眞つ先きに降りようとして、欄干に手を掛けたが、直ぐよろけ出した。背後にゐた學士と女とが手を貸した。病人は「少し目舞ひがするのだよ」と云つた。

「それはあたり前さ。何週間も寢臺の上に寝てゐたものが、久しぶりに起きたのだから。」かう云つて、學士が片手を掴へると、女が反對の側の手を掴へた。そして兩方から支へて、梯子段を連れて降りた。

病人の降りて來るのを見て、御者が帽を脱いで禮をした。向

ひの家の窓から女が二三人顔を出して、氣の毒さうに見てゐる。學士と女とで、死人のやうに青い顔の病人を車へ連れ込むのを見て、家番の親爺も手を貸さうとして進み出た。

車が出て行つた跡で、家番と向ひの家の女達と意味ありげな、同情のある目付きをして顔を見合せた。

四十六

最後の鐸が鳴るまで、醫學士が汽車の踏板に足を掛けて、マリイと雑談をしてゐた。

フェリックスは車室の隅に腰を掛けて、何事にも興味を有せないやうな様子をしてゐる。その内汽笛が鳴り出したので、病人もやうやう気が付いたらしく、學士の方へ向いて合點合點をした。

汽車が動き出した。學士は暫くの間、プラットフォームに立ち止まつて、見送つてゐたが、ゆるやかに踵を旋らして歸つた。

汽車が停車場の屋根の下を離れるや否や、女は男の側へ腰を掛けて男の希望を尋ねた。コニヤツクの瓶の栓を抜かうか、本を取つて渡さうか、新聞を讀んで聞かせようかといふのである。男はその親切に感じたらしく、女の手を握つた。そして「メランに着くのはいつだい」と問うた。女は確とした時刻を覚えてゐなかつた。そこで男は女に旅行案内を調べさせた。晝食はどこで食べられるか、夜泊るのはどこであるか、などといふ事を

調べたのである。その外いつも氣にしない、色々な細かい事を調べさせた。それからこの列車に乗つてゐる人の數は何人位だらうと云つて、勘定をして見たり、その中に若夫婦がゐるだらうかと云つたりした。それから暫くしてコニヤックが飲みたいと云つた。併し一口飲むとひどく咳が出たので、これからは自分か飲みたいと云つても、飲ませてくれば困ると、女に言ひ付けた。

その跡で男は新聞の中で氣象の事を書いてあるところを女に讀ませて、天氣が好さうだといふ豫報を聞いて、満足らしく頷いた。その時汽車は丁度ベンメリングを通つてゐた。男は注

意して窓の外の景色の變るのを見てゐて、折々「好い景色だな」などといふ。併しその聲の調子は、喜んで言ふらしくは見えなかつた。晝時分になると、女が用意して來た冷肉を出して食べさせた。その時男はコニヤックを飲まうと云つた。女がそれは悪からうといふと、男はひどくおこつた。女は爲方なしに少し飲ませた。今度は飲んでも障らずに、却てひどく機嫌が好くなつて、何事に付けても興味を有するやうになつた。窓の外に見える景色や、通過する停車場で見た事を批評するのである。その末にかう云つた。「己がいつか讀んだ物の中にソムナンビエウルの事が書いてあつた。そいつは自分の病氣に利く藥を夢に見

て知つたのだ。どの醫者も氣の付かなかつた薬ださうだ。その薬を飲むと病氣が直つたと云つてあつたよ。なんでも病人は自分のしたいと思ふ事をするに限ると、己は思ふ。」

「きつとさうなのよ」と、女が答へた。

「なんでも南の國に限る。南の國の空氣が好いのだ。世間の人は南の國の空氣の違ふのは、暖で年中花を咲かせるのと、オンが少し多いのと、嵐が吹いたり、雪が降つたりしないのと、只それだけだと思つてゐる。實はその外にどんなものがあつちの空氣の中に漂つてゐるか、誰も知らないのだ。何か我々の夢にも知らない、祕密な物質を含んでゐるかも知れないぢやないか。」

か。

「兎に角あつちへ入らつしやると、あなたきつと御丈夫にお成りなさいますわ。」女は病人の手に取つて接吻した。

男は色々な事を話し續けた。イタリヤでは大勢の畫工に出逢ふだらうといふ事、古來王侯や藝術家が望んでロオマへ行つたといふ事、自分がマリイと知り合ひになるより餘程前に、一度エネチアへ行つた事があるといふ事などを話したのである。とうとう話し草臥て、腰掛の上に横になつた。それから夕方になるまでとうとうとしてゐた。

四十七

女は向側に坐つて、男の様子を見てゐる。心持ちは割合に落ち着いてゐる。只氣の毒だといふ、軽い同情がある。男の顔は如何にも青い。それに此頃めつきり更けて見えるやうになつた。初め美しかつたこの男の顔が、春頃からこの方、どんなにか變つただらう。女の思ふには、自分の頬だつて、折々青く見える事はあるが、この男の顔の色は、それとはまるで變つてゐる。

317

自分の顔は、青い時は却て若く、娘らしく見える。男のは反對である。同じ青さでも、自分は青くなるのが、男と違つて得ないのである。かういふ考へは、この時初めてはつきり心に浮んだ。こんな事を考へ付いて、なぜそれが切なく思はれないだらう。これはきつと男に對する同情が無くなつたのではあるまい。多分近頃自分が極端に疲勞してゐて、よしや折々氣分が好くなつたやうに思つても疲勞が眞に直る事がないからであらう。こんなに疲勞してゐるのは、却て自分の爲合せである。もしこの疲勞が無くなつたら、男の身の上をどんなにか切なく感ずるだらう。そしていつかその感じをしなくてはならないかと思ふと、

それが今から如何にも恐ろしい。

こんな事を考へながら女は寐入つてしまつたが、或る一刹那にその眠りか突然醒めた。あたりを見廻せば、殆ど眞つ暗になつてゐる。車室の天井に下がつてゐる明りには布が掛けてあるので、室内は鈍い緑色に照されてゐる。窓の外は闇夜である。丁度長い、長いトンネルを通つて行くやうな氣がする。

なぜ驚いて目を醒ましたのだらう。進行する汽車の車輪の音が、單調に聞えてゐる外には、あたりに物音はしないのである。暫くして目が薄明りに慣れたので、男の顔が見えて來た。よく眠つてゐるらしい。少しも體を動かさずにゐる。暫く見てゐ

るうちに、忽ち男は深い溜息を衝いた。氣味の悪い、訴へるやうな聲が出た。それを聞いて、女は動悸がし出した。さつき驚いて目を醒ましたのは、多分今のやうな溜息を聞いたからであらう。

かう思つた直ぐ跡で、女は又びつくりした。それはよくよく男を見ると、眠つてはゐないのである。男は目を大きく、大きく見開いてゐる。それがはつきり見える。この空に向ひ、遠方に向ひ、暗黒に向つて開いてゐる目が、女の爲めには氣味が悪くつてならない。その内男は又うめいた。その聲は前よりも氣味悪く訴へるやうである。それから男は身を動かして、又溜息

を衝いた。併し今度のは苦しげではなくて、寧ろ荒々しいのである。

突然男は両手を腰掛の布團の上についで身を起して、兩足で掛けてあつた鼠色の外套を下へ蹴落して、立ち上がらうとした。併し汽車の動搖に妨げられて、又腰掛の隅へ倒れ掛かつた。

女は驚いて飛び起きた。そして明りに掛けてある緑色の紗を退けようとした。そのとたんに女は男に抱き付かれた。

かがた願えてゐる女を、男は自分の膝の所へ引き据ゑて、咳唖た聲で、「マリイ、マリイ」と呼んだ。

女は振りほどかうとしたが、それが出来なかつた。健康であ

つた時と同じ程な力を恢復したらしい様子で、男はしつかり女を抱き締めた。そして唇を女の頰の側へ寄せて呷くのである。

「マリイ。覺悟をしてゐるか。」

女にはその意味がちよつと分らなかつた。只際限もなく恐しいと感ずるだけである。併し抗抵する力はない。叫ばうと思つても聲が出ない。

「覺悟をしてゐるか」と、男は繰り返した。併し男の手が少し緩んだので、男の唇、その息、その聲が前より遠くに離れて感ぜられた。そして女は前より樂に息が出来るやうになつた。その時女はやうやうの事で、恐る恐る云つた。「どうしようと呼や

るの。
 「己のいふ事が分らないのか。」
 「放して下さい、放して下さい。」女は叫ぶやうに云つたが、その聲は進行してゐる汽車の響に消されてしまつた。
 男は少しも女の言ふ事に構はない。併し手だけは放した。女は男の膝元から起き上がつて、向ひの腰掛の隅に坐つた。

四十八

「己の言ふ事が分らないのか」と、男は繰り返した。
 「どうしようかと仰やるの」と、女が向ひの腰掛の隅で呟いた。
 「己は返事が聞きたい。」
 女は黙つて顔えてゐる。そして早く夜が明ければ好いと思ふのである。
 男は前屈みになつて小聲で云つた。「もう時間が切迫して来る

から、お前の覺悟は好いかと問ふのだ。」前屈みになつて云ふので、今度ははつきり聞えた。

「時間と仰やるのは。」

「お前と己との時間だ。」

男の心持ちが分かつたので、女は咽を締め付けられるやうな氣がして、何も言ふ事が出来ずにゐる。

「お前、覺えてゐるだらうな。この事をお前に相談する權利を、お前は己にくれた事がある。覺えてゐるだらうな。」男の聲は少し優しくなつて、殆ど嘆願するやうに聞える。男は女の兩手を取つた。

男の詞は氣味の悪い詞であるが、その目が前のやうに空を睨んでゐないのと、その聲が前ほど人を嚇すやうでないのと、爲めに、女は少し落ち着いた。今見れば男は自分に頼んでゐるやうである。

男は又「お前、覺えてゐるだらうね」と繰返したが、今度はその聲が泣き出しさうに聞えた。

女はこの時やうやう物の言はれるまでに、力を恢復した。そしてまだ唇を顫はせながら云つた。「あなた、それは子供らしい事ですわ。」

男は女の詞が耳に這入らないらしい様子をして、半分忘れた

事を、再びはつきり思ひ浮べるやうに穩かな調子で云つた。「もうお暇乞ひが近くなつた。お前と一しよに行つてしまはなくてはならない。己達二人の時間がおしまひになるのだよ。」

女の爲めには、この詞が自分を縛つて、自分の運命を極めてしまつて、這れやうのないやうにするらしく聞えた。低い聲で呟いたのであるが、如何にも力強く聞えた。もし同じ詞でも、荒々しく嚇すやうに言はれたなら、抗抵しやうもあつたのだらう。併し今のやうに靜かに言はれると、なんとも答へる事が出來ない。暫くして男が少し前へ寄つて來たので、女の恐怖は極端に達した。今少しで男に飛び付かれて、咽を締められるので

はあるまいかと思つたのである。そこで車室の反對の隅に飛び退いて硝子窓を打ち破つてでも、人に救ひを求めようかと思つた。

併しその瞬間に、男は女の手を放して、體を背後へ寄せ掛けて、もうこの上何も言ふ事はないといふやうな様子をした。

「あなたはほんとに分らない事を仰やるわ。これから南の方へ入らつしやつて、すつかり丈夫にお成りなさるのではありませんか。」女はかう云つて見た。

男は向側で體を背後に寄せ掛けて、物を案じてゐる。

女は立ち上がつて、明りに被せてある緑色の紗を除けた。ま

あ、明るくなつただけでも、どんなにか力強く感ぜられるだらう。明るくなつてからは、胸の動悸が鎮まつて恐怖が薄らいだ。女は元の所へ坐つた。

男は床を睨んでゐたが、この時顔を上げて女と目を見合せた。そしてゆつくり云つた。「マリイ。己は夜が明けたつて、もう馬鹿な望みは起さない。南の方へ行つたつて駄目だ。けふそれが己にはつきり分かつたのだ。」

なぜあんなに落ち着いて來たのだらうと、女は思つた。安心させて騙すのではあるまいか。逃げ出されては困ると心配して、あんな真似をするのではあるまいか。かう思つて、女は用心す

る氣になつた。そして男が何を言つても、その詞には耳を貸さないで、熱心に男の様子を観察してゐる。その目付き、その體の運動に、一々注意してゐる。

男が云つた。「お前には意志の自由がある。假令これまでに己に誓つた事があつても、己はお前に約束を履行しろといふのではない。お前に脅迫しようとは思はない。まあ、その手を握らせてくれ。」

四十九

女は握手した。併し自分の手を上にするだけの注意をした。
 「早くその時になれば好い」と、男は呟いた。
 「わたしあなたに忠告しますわ。少しお眠りなさるが好いのよ。
 もう今に夜が明けます。そしてメランに一二時間で着くのです。」
 「己はもう寐られない」と、男は云つて顔を上げた。そして女
 と目を見合せて女の表情に、自分を疑つて自分を窺つてゐると

ころがあるのに気が付いた。そして女の腹がすつかり分つたと
 思つた。どうも女は己を寐かし付けて、次の停車場でそつと降
 りて逃げようとしてゐるらしい。かう思ふと、なんともかとも
 云はれない心持ちになつたので、男は叫んだ。「お前なにかたく
 らんでゐるね。」

女はぎつくりした。「いゝえ。」

男は立ち上がらうとした。

その様子を見るや否や、女は車室の反対の隅へ駆けて行つた
 ので、男との距離が大分大きくなつた。

併し男は只「息が、息が」と苦しさに云つて、慌たしく

窓を開けて、首を外へ出した。急に立ち上がらうとしたのは、呼吸が苦しくなつたからであつた。

女は安心して、又男の側へ戻つて、窓から首を出してゐる男を徐かに腰掛の上へ引き据ゑた。

「あなたそれはお爲めに悪いわ。」

男は苦しげに息をしながら、腰掛の隅に坐つてゐる。

女は片手を窓の縁に掛けて、暫く男の側に立つてゐたが、又自分の元の席に歸つた。暫くして男は樂な息をするやうになつて、その唇には軽い微笑みが見えた。女は氣の毒げに、心配らしく男の顔を見た。「窓を締めさせうね。」

男は頷いた。そして「朝だ、朝だ」と叫んだ。この時地平線に赤み掛かつた灰色の横雲が見えて來た。

二人は暫く黙つて向き合つてゐた。それから男が、さつきの微笑みを口の周圍に見せて云つた。「お前は覺悟が悪いね。」

女は何か不斷の調子で言つて遣りたかつた。男の言ふ事が子供らしいとか、なんとか云ひたかつたのである。併し男の微笑みに打ち破られて、その詞は出されなかつた。

汽車が速度をゆるめた。數分間にして、朝食をする筈の停車場に着いた。

プラットフォオムには給仕がパンや珈琲を持って駆け廻つて

る。旅客の中には、こゝで下車するものもある。人の呼び交す聲が喧しい。

女は恐ろしい夢の醒めたやうな心持ちがした。この世の常の停車場生活が、如何にも快いのである。自分の體になんの危険もないと思ふので、すつかり安心して、座を立つて、プラットフオームを眺めてゐたが、とうとう一人の給仕に手招きをして呼び寄せて、一杯の珈琲を買つた。

男は女の珈琲を飲むのを眺めてゐたが、女が勧めても、首を振つて聴かなかつた。

五十

間もなく汽車が又動き出した。停車場の屋根の下を出離れると、本當の晝の明りになつた。なんとといふ好い天気だらう。それに向うには朝日に赤く染められた山々が聳えてゐる。女はもう夜になつても、こはがらずにゐられさうだと思つた。男は折窓の外を眺めて、成るだけ女と目を見合せないやうにしてゐる。ゆうべの事を少しは恥かしく思つてゐるのだなと、女は思

つた。

汽車は少しづつ、行つて一二度停まつた。それからメラン停車場に這入つたのは、夏のやうに暖かく日の差してゐる午前であつた。

「さあ、着きました。やつとの事です。女が嬉しうにかう云つた。

二人は馬車を雇つて、似合はしい家を探して歩いた。「別に儉約をしなくても好い、まだ己の財産が無くなりはいはしないから」とフェリックスが云つた。貸家があるたびに、取者に車を留め

させて、マリイが間取りの様子や庭などを見て来る間、男は車の中に待つてゐた。

程なく氣に入つた家を見つけた。小さい家で、中二階のやうに出来てゐる。それに小さい庭が付いてゐる。マリイは家主を連れて出て来て、車の中に坐つてゐる男に、この貸別荘の好い所を話させた。男は別に異議がなかつたので、數分時間の後に、二人はその家を借り受けた。

女は忙しうに片付け物をしてゐるのに、男は構はずに寢部屋へ這入つた。寢部屋の中だけは男もざつと様子を見廻した。

随分廣くて氣持いが好い。明るい緑色の形紙で壁が張つてゐる。

大きい窓が開けてあるので、庭から這入つた草木の匂が部屋一ぱいに満ちてゐる。窓に向き合つて、寢臺が二つ据ゑてある。男は草臥切つてゐたので、直にその一つに寝轉んだ。

その隙にマリイは家主の女にそこらを見せて貰つて、庭に出て見てひどく喜んだ。庭は高い格子のやうな柵で圍んである。裏門が付いてゐて、家の中を抜けずに這入つて來られるやうにしてある。その裏門の外は廣い道で、そこから停車場へは眞つ直で、街道を過ぎるよりは早く往來する事が出来るのである。部屋へ歸つて見ると、男は元の儘に寢臺の上に寝てゐた。聲を掛けて見たが返事をしない。ずつと近く寄つて見ると、顔の

色がいつもより一層青く見えた。もう一遍呼んで見たが、矢張り返事をしない。又身動きもしない。

女はひどく驚いて家主の女を呼んで、醫者を請待する事を頼んだ。家主の女が出て行つた、直ぐ跡で、男は目を開いた。併し何か言はうとして起き上がつたが、直ぐ苦しげな顔をして倒れて、うめき聲を出してゐる。口の角から血が少し流れてゐる。女は途方に暮れて側に寄つて見詰めてゐた。それからもう醫者が來さうなものだと、戸口へ走つて行つたり、又病人の側へ戻つて來て、名を呼んで見たりした。そして心の内で、アルフレットさんがゐてくれたらと思つた。

やうやうの事で醫者が来た。頬髯の白い老人である。女は出迎へて、「どうぞどうかして上げて下さいまし」と云つた。それから逆上してゐる気分を出来るだけ落ち着けて、これまでの様子を話した。

醫者は病人の様子を見て、脈を取つて今血を吐いたばかりのところだから、精しい診察は出来ないと言つて、色々養生の事を話した。

醫者が歸り掛けるので、女は門口まで送つて行つて、「どうぞごさいませう」と問うた。

「まだなんとも云はれませぬね。先づ暫く忍耐して御様子を見

てお出でなさい。決して失望するには及びませぬ。」醫者はかう答へた。そして今晚又見に来るといふ約束をして、馬車に乗つて、優しく平氣な様子で會釋をして、歸つて行つた。その様子がまるで形式的な訪問をした人のやうであつた。

女はちよつと途方に暮れて立つてゐたが、忽ち思ひ附いた事があるらしく、一人領いて郵便局へ駈けて行つた。醫學士に宛てた電報を打つたのである。

電報を打つてしまふと、気分が餘程落ち着いた。そこで内へ歸つて、留守中病人の世話をして呉れた家主の女に禮を云つて、着いた早々色々世話になつて濟まないが、いづれお禮をすると

誓つた。

男は旅行服のまゝで、生氣を失つて床の上に寝てゐる。併し息は餘程樂になつた。

マリイが病人の枕元に腰を掛けてゐると、家主の女が慰めて、これまで大病人が此メランに来て直つた話をした。それから自分も若い時病身であつたが、今は此通り丈夫になつてゐると云つた。夫から身上話しをし出した。この女は随分不幸な目に逢つたといふのである。亭主は結婚してから二年立つと死んでしまつた。息子は遠方に行つてゐる。望みを言へば限りはないが、今この家を預つて人に貸してゐるのは、自分の身の上を取つて

は不足ではない。本當の家主はポオゼンに住んで居て、月に二度位見廻りに来るだけである。こんな風に色々細かい事まで話し出して、大層親切さうにする。それから荷物をはどく手傳ひをしようといふので、マリイは喜んで手傳つて貰つた。

程なく晝食を運んで来た。病人のと云つて、牛乳が添へてゐる。

その内病人が少し體を動かした。なんだか氣が付きさうな様子である。暫くして實際氣が付いたと見えて、頭をあちこち動かして、とうとう自分の上にかぶさるやうにして看病してゐる。マリイの顔に目を付けた。そしてにつこりして、靜かに手を握

つた。「一體己はどうしたのだらう。」

午後になつて醫者が来た。大分様子が好いからといふので、着物を着換て、寢臺に寝るやうに差圖した。病人はおとなしく醫者の言ふがまゝにしてゐた。

マリイは病人の側を離れずにゐる。まあ、なんといふ長い半日だらう。醫者の言付けで開けて置いた窓から、庭の草木の匂がほのかに通つて来る。あたりはひつそりしてゐる。マリイは日の光が床の上に落ちてきらきらしてゐるのを、無心で眺めてゐる。その手を病人は握つて放さずにゐる。男の手は冷たくて濕つてゐる。それが女には心持ちが悪い。女は折々何か言はう

と思つて、かめて口を開く。「もう大分好いでせう。それ御覽なさいな。あなた何も言ふのではありませんよ。物を仰やつては悪いのですから。あさつてあたりはきつと庭に出て御覽なされる事が出来ますわ。」

男は頷いて微笑むのである。

女は心の内に、いつアルフレットさんが着くだらうかと、時間勘定をしてゐる。あすの夕方には來られる筈である。さうして見ればまだ一晩と一日だけは待たなくてはならない。ほんにあなたの方が早く來て下されば好い。

半日が如何にも長い。日は入つた。部屋が次第に薄暗くなつ

て來る。併し庭の方を見れば、白い砂の敷いてある道の上や、格子になつてゐる柵に、黄いろい日の光がまだあたつてゐる。

突然男が「マリイ」と呼ぶのが聞えた。庭の方を見てゐた女が、急に病人の方へ振り向いた。

「もう大分好いよ」と、男が意外に大きい聲で云つた。

「そんなに大きな聲をしては行けませんよ」と、女が優しく留めた。

「大分好い。今度のは旨く経過したやうだ。これが病氣の轉機になるのかも知れない。」今度は呟くやうに云つた。

「きつとさうですわ。」裏書をするやうに女が云つた。

「己は空気が好いから好くなりさうに思ふのだ。併し今のやうな奴が又来てはかなはない。今度は駄目だ。」

「だつて、もう御気分が好いちやありませんか。」

「いや。兎に角お前は親切だよ。好く氣を付けてゐてくれ。」

「そんな事は仰やるまでもありませんわ。」女は少し不平らしく云つた。

「己がいよいよ行く時には。お前も一しよに連れて行くのだよ。」男はかう叫いた。

その詞を聞くと同時に、女は非常に恐怖に襲はれた。なぜこんなにはいのだらう。何もこの男がこつちに危険を加へよう

とは思はれない。暴行を加へようと云つても、もうこんなに弱くなつてゐてはそれは出来ない。體力から言つて見れば、今ではこつちの方が病人の十倍も強い。一體男はどうしようと思つてゐるのだらう。今も空を見たり壁の方を見たりしてゐるが、なんと思つてゐんなに見廻してゐるのだらう。もう一人で起き上がる事も出来さうにはない。それに刃物などは持つてゐない。それとも毒でも持つてゐるのだらうか。事に依つたら、どらにかして毒を手に入れて、現に持つてゐて、それをこつちの飲むものに入れようとするかも知れない。それにしてもその毒はどこにしまつてゐるだらう。さつきも着物はこつちが着せ替

へて遣つた。粉薬か何かを紙入に入れて持つてゐはしないか。紙入はあの上着にある筈である。いやいや。さつきのやうな事を言つたのは、あれは熱が言はせたのだ。それにあんな事を言つて、こつちを苦しめようと思ふだけの事かも知れない。

五十二

併し熱があんな事を言はせるとして見れば、同じ熱がどんな事を実行させないにも限らない。事に依つたらこつちが眠つてゐる内に、咽を締めようとするかも知れない。それは格別力がなくても出来る事である。その時氣を失つたら、跡はどうせられるか分らない。なんでも今夜は寐ずになんてはならない。あしたはアルフントさんが来るのだから。

日が段々暮れて来た。もう夜になつた。病人はその後一言もものを言はない。もう口の周囲に見えてゐた微笑みの影も消えた。今は真面目な、陰気な顔をして空を見詰めてゐる。暗くなり切つた時、家主の女が蠟燭を點して来て、病人の寢てゐる側の、今一つの寢臺を拵へに掛かつた。それを見てマリイはそれには及ばぬと、手真似で知らせた。それが病人に分つたと見えて、「なぜ拵へさせないのだ」と云つた。それから間を置かずに、「そんなにしなくても好い、お前も寢なくては好けない、己はもうこんなには好いのだから」と言ひ足した。

この病人の詞が、マリイの耳には嘲りのやうに聞えた。女はとうとう寢臺へ行かずにゐた。病人の寢臺の側で目を瞑らずに、長い沈黙の夜を過してゐる。病人は大抵静かにしてゐる。女は折々病人が寐た振りをして、こつちに安心をさせようと思ふのではないかと疑つた。病人の顔を好く見ようと思つても、蠟燭がちら付いて、病人の目の周囲や、口の脇に、瘰癧するやうな運動があるやうに見えたり、又それが明りのせいのように思はれたりして、どうもしかと見定められない。女は立つて窓迄出て庭の方を眺めた。外は鈍い青色を帯びた闇である。少し乗り出して仰いで見ると、庭の木立の眞上の所

に月が出てゐる。風はちつとも吹かない。あたりが如何にも静か
かで、何一つ動くものがないので、暫くぢつと見てゐると、向
うにはつきり見えてゐる外圍の柵がじりじりと手前の方へ寄つ
て来て、暫くして又留まるやうに見える。

夜中過ぎに病人が目を醒ました。女は枕の歪んだのを直して
遣つた。その時ふと思ひ付いて指で枕の下を捜して見た。何か
隠してありはしないかと思つたのである。併しなんにも無かつ
た。

女の耳には「お前を連れて行く、お前を連れて行く」といふ
詞が絶えず響いてゐる。併し好く思つて見れば、男が眞面目に

さう思つてゐたら、そんな事を言ふ筈がないやうでもある。男
が實際何かたくらむ程の氣力を持つてゐるだらうか。もし持つ
てゐるとしたら、飽くまで目的を隠して、けどられないやうに
すべきではあるまいか。事に依つたらこつちは病人の譚話を氣
にして、子供らしく恐れてゐるのかも知れない。

女は段々眠たくなつて来た。そこで萬一の用心に、自分の椅
子をずつと遠くへいざらせた。併しどうしても寐入らない積り
でゐる。

其内思想が段々不明瞭になつて来た。晝間の明るい意識から
次第に灰色の夢の薄明りに這入つて行く。昔の記念が浮ぶ。樂

しかつた時代の晝の事、夜の事が思ひ出される。男が自分の體を抱いてゐてくれて、部屋の内、新春の息が通つてゐた時の事を思ひ出す。

女は庭の物の香が自分の坐つてゐる所まで這入つて來なくなつたやうに思つた。窓の所まで行つて、其香を吸ひ込みたいのである。なんだか病人の髪の毛から、厭な甘つたるい匂が立ち昇つて部屋中に満ちてゐるやうに思ふのである。

「いよいよおしまひになつたらどうだらう。この「おしまひになつたら」といふ事を思つて見ても、もう別段驚きもしない。心の底の恐ろしい願ひを、「當人も樂になるのだから」といふ偽善

の同情で覆ひ隠す、この如何はしい詞が口の内に浮んで來ても、もう驚かなくなつてゐる。さうなつたらどうだらう。女は自分の體が外の庭に出て腰を掛けてゐて、その顔が青ざめ、目が泣き腫れてゐるのを見るやうに思ふ。併しこの悲哀の徴は只上邊ばかりである。心の内には、これまで久しく味はずにゐた、嬉しい平和が來てゐる。見てゐる内に其姿が立ち上がつて柵の外へ出て、道をゆつくり歩いて行く。もうどこへでも自由に行かれるのである。

五十三

こんなにはんやりした想像をしてゐながら、女は男の寐息を聞く事を怠らない。寐息は折々うめき聲になる。

夜は次第に明けて来た。やつと明るくなつたと思ふと、家主の女が来て交代してくれようと云つた。マリイは嬉しさに同意して、病人を一目見て、次の間へ出た。そこには家主の女が長椅子を寢床に拵へて置いてくれたのである。まあ、なんと

ふ好い心持ちだらう。女は着物を着たまゝ横になつて、直ぐに目を閉ぢた。

餘程時間が立つてからマリイは目を醒ました。部屋は氣持の好い薄明りになつてゐる。鏡戸を締めた窓から日の光が狭い筋になつて差し込んでゐる。女は急いで起き上がつて、直ぐに自分の現在の位置をはつきり考へる事が出来た。けふは醫學士のアルフレットさんが着く筈である。これから出逢はなくてはならない、暫くの間、陰氣な境界に對して、この人の來るといふ事が餘程力になるのである。

女は躊躇せず病人の部屋に這入つた。戸を開けた當座一秒時間程は病人の寢床に掛けてある白い布に目を射られて、物が見えなかつた。暫くしてから見ると家主の女がゐる。それが指先を口に當て、物を言ふなといふ合圖をして椅子から立ち上がつて、爪先で歩きながら、マリイを出迎へた。そして「好くお休みです」と叫いて、それから今までの様子を話した。一時間程前までは、熱がひどい様子で目を醒ましてゐて、二三度奥さんの事を聞かれた。朝早くお醫者が来て見たが、容體は前と變つた事もないといふ事であつた。その時奥さんを起さうかと思つたが、醫者がそれには及ばないと云つた。醫者は午後の内

に、又一度来て見る筈だといふのである。

マリイはこの話しを注意して聞いて、自分に代つて看病してくれた禮を言つて、病床の側の椅子に腰を掛けた。

けふは暖かい日である。殆ど蒸し蒸しすると云つても好い位である。もう正午に間もあるまい。庭の方を見れば、静かな重くろしい日の光が差してゐる。

寢臺の上を見て、最初に目に付いたのは、病人の両手である。両手は着布團の上に出てゐて、折々びくびくと動いてゐる。それから顔を見れば下顎が縮りなくなつたので、唇が軽く明いてゐる。色は死人のやうに青い。數秒時間呼吸の息んでゐる時があ

る。それから上面でするやうな、吸るやうな息をする。

「事に依つたらアルフレットさんの来ない内に、死んでしまふのではあるまいか」と、女はちよつと思つた。今寐てる病人の様子を見れば、顔付きに惱んでゐる青年の表情が見える。ひどい苦痛の跡の弛緩、勝算の無い闘ひの跡の諦めが見える。かういふ容態が昨今暫らくの間見えぬたといふ事に、女は急に氣が付いた。それは病人が女を見るたびに、その顔に不平が現はれてゐたからである。多分今は夢の中でも女を憎んではゐまい。あんなに美しい顔付きになつてゐるから。

女は今目を醒ましてくれ、ば好いと思つた。そしてちつと病

人を見てゐると、なんとも言はれない悲しみと悔みとが起つてゐる。今こゝで死に掛かつてゐるのは戀人に違ひない。女は急に避くべからざる、恐ろしい運命に自分が製はれるのだといふ事を感じて、一時に何もかも分かつたやうに思つた。矢張この男が我が幸福、我が生命であつたのだ。自分はこの男と一しよに死んでも好いとまで、思つた事もあつた。それにその男の歸らぬ旅に赴く一刹那が、今迫つて來てゐるのである。かう思つて見れば、これまで一時自分の胸の上にかぶさつてゐた冷やかさ、何日も續いてゐた無情が解せられないものゝやうになつて來る。それでも今はまだ男が生きてゐる。息もしてゐる。夢で

も見てゐるかも知れない。併しもう程なく死んでしまふだらう。そして葬られてしまふだらう。どこかの静かな墓地の土の下に埋られて、次第に朽ちて行くのに、その土の上では何事も無い日が立つて行く事だらう。そして自分には生き残つて、人交りもするだらう。自分の愛してゐた男は沈黙した墓の中にあるといふ事を知つてゐながら、人交りもするだらう。

女の顔に傳はつて、涙が止所もなく流れる。とうとう女は聲を立てた。その時病人が動いた。女は急いでハンカチーフで頬を拭いた。その時病人は目を開いて、何か問ひたさうな目付きで、暫く女をぢつと見てゐた。併し何も言はなかつた。それか

ら二三分立つてから、男が「お出で」と叫びた。
女は椅子から立ち上がつて、男の上に身を屈めた。

五十四

男は腕を伸ばして女の頸を抱きさうにしたが、それを止めて、又腕を卸した。

「お前泣いたのか。」

「いゝえ」と女は急に答へて、額に翻れ掛かつてゐる髪を搔き上げた。

男は又ちつと眞面目に女の顔を見て、それから顔を反けた。

何か物を案じてゐる様子である。

女は考へた。それは醫學士に電報を打つた事を、病人に打ち明けて話したものだらうか、どうだらうかと云ふ問題である。

友達が来るのだから、知らせた方が好くはあるまいか。いやいや。そんな必要はあるまい。なに、學士が来た時に、自分も不意であつたといふ風をすれば済むのである。

その日の暮れるまで、女は鈍い緊張を感じて、来る筈の人を待つてゐた。目前の事は總て霧の中で見るものゝやうに、ぼやけて過ぎ去つてしまふ。醫者の見舞ひなどは、なんでもなく済んでしまつた。病人は始終何事にも感ぜずにゐる。呻吟して

半眠りになつてゐる状態から、折々醒めて、なんでもない事を問うたり、何か欲しがつたりする。時間を問ふ事もある。水を飲みたがる事もある。家主の女が出たり這入つたりする。マリイは始終外へ出ずに、病人の側の椅子に掛けてゐる。時々は寢臺の背後の横木に手を掛けて立つてゐる事もある。又窓の所へ行つて庭を見てゐる事もある。庭では木の影が段々長くなつて、とうとう草原や道の上を闇が這ひ寄つて來た。

少し蒸し蒸しするやうな晩である。病人の枕元の卓の上に付けてある蠟燭の火が殆ど少しも動かない。すつかり暮てしまつて、向うの奥に見える青み掛かつた鼠色の山の上に月が出た頃、

風が少し吹いて來た。それが額に當るのを、女は好い心持ちだと思つた。

病人も同じ感じであるらしく、頭を動かして、大きく開けた目を窓の方へ向けた。それから深い深い息をして、「ああ」と云つた。

女は布團の脇へ垂れてゐる病人の手を取つて、「何か上げませうか」と云つた。

病人はそつと手を引いて、「マリイ、こつちへお出で」と云つた。

女は側へ寄つて、頭を病人の枕近く寄せた。

病人は女の髪の上に、祝福をするやうに、手を擴げて載せて、小聲で、「お前のこれまでの親切は難有かつたよ」と云つた。
 女は頭を病人の枕に寄せ掛けてゐたが、目に涙が湧いて來た。部屋の中はひつそりしてゐる。遠くから汽笛の汽車の聲が消え消えに聞えて來た。その跡は又しんとして、夏の夕べの重くろしい、甘いやうな、不思議な感じが満ちてゐる。
 病人が突然寢床から起上がつた。その動作が如何にも急で劇しかつたので、女はびつくりした。そして頭を上げて、病人の顔をぢつと見た。

病人は両手で女の顔を挾んだ。昔可哀がつた時にしたやうな

し方である。「マリイ。約束の事はどうしてくれるのだ。」
 「約束とはなんでせう。」かう云つて、女は病人の手を放さうと思つた。

病人は平生の力を悉く恢復し得たやうに、しつかり女の頭を抑へて放さない。「己と一しよに死んでくれる約束ぢやないかと、忙しい語調で云つて、女の顔の側へびつたり顔を寄せた。病人の息が女の口に障る。

女は顔を引かうとしても引かれない。

病人は自分の詞を一句一句女の口に注ぎ込ひやうに言ふのである。「己は一人で行くのは厭だから、お前を連れて行くよ。己

に、自分の頭を病人の手から引き放した。

んれみ

はこんなにお前を愛してゐるのだから、お前を手放して置く事は出来ない。

女は恐ろしさに麻痺したやうになつてゐる。その咽からは自分にも殆ど聞えない位な、咳噎れた叫び聲が出た。顛顛と頬とをしつかり抑へられてゐて、頭を動かす事が出来ない。

病人は頻りに口説き立てる。濕つばい、熱い息が女の顔に觸れる。「一しよだ。一しよだ。お前の意志でさう極めたのぢやないか。一人ではこはくて死なれない。一しよに死んでくれるかい。」

女は足で自分の椅子を押し退けた。そして鐵の箍を脱すやう

人間は何も持たず、命をまかせた。生きていくことに何をするか、
せんとすまぬに、生命のものをすらすらと、惜しまないで、何となく、
手は、あの静かな、孤独の海に向って、静かに、冷かに、死の淵の底へ

んれみ

限、泳いで行かうと、思ふ。そして、その前後に、我々の間に、
かゝりたい。 五十五

死、その後の、矢張り生きていく。或は、待たされた。内か、
それは、静かな、孤独の海に向って、静かに、冷かに、死の淵の底へ
病人は女の顔を挟んで、そのまゝにしてゐる。丁度
死、その後の、矢張り生きていく。或は、待たされた。内か、
それは、静かな、孤独の海に向って、静かに、冷かに、死の淵の底へ

死、その後の、矢張り生きていく。或は、待たされた。内か、
それは、静かな、孤独の海に向って、静かに、冷かに、死の淵の底へ
病人は女の顔を挟んで、そのまゝにしてゐる。丁度
死、その後の、矢張り生きていく。或は、待たされた。内か、
それは、静かな、孤独の海に向って、静かに、冷かに、死の淵の底へ

死、その後の、矢張り生きていく。或は、待たされた。内か、
それは、静かな、孤独の海に向って、静かに、冷かに、死の淵の底へ
病人は女の顔を挟んで、そのまゝにしてゐる。丁度
死、その後の、矢張り生きていく。或は、待たされた。内か、
それは、静かな、孤独の海に向って、静かに、冷かに、死の淵の底へ

病人は寝臺から飛び降りたい様子で、起き上がった。併しも
う力を使い盡したと見えて、死物のやうにはたりと寝臺の上に
倒れた。

女はそれを見返らずに、戸を引き開けて、次の間を走り抜け
て、廊下へ出た。殆ど夢中である。男が自分を締め殺さうとし
た。額や頬から、頸へ滑り落ちようとした、男の指をまだ肌
に感じてゐる。女は門口へ出た。そこには誰もゐない。家主の
女は夕食の品物を買ひに出た筈だといふ事を思ひ出した。
どうしよう。女は引き返して廊下を抜けて、庭へ出た。人に
追ひ掛けられるやうに、草原や道を横切つて、庭の向うの端ま

で行つた。そこから振り返つて見れば、病人の部屋の窓が見える。窓には蠟燭の火がちらちらしてゐるが、その外にはなんにも見えない。

「どうしたのだらう」と獨語を云つた。そして自分もどうして好いか、分らなかつた。只意味もなく柵の内をあちこち走り廻つてゐる。

その時ふと思ひ出した事がある。アルフレットさんが来る筈だつた。丁度今頃来る筈だつた。かう思つて柵の格子の間から、月の差してゐる道を眺めた。停車場の側まで見えてゐるのである。

女は庭の戸のある所へ駆け寄つて、戸を開けた。目の前には人のない、白い道が見えてゐる。もし外の道からお出でなさりはすまいか。いや。あそこに人影が見える。次第に近くなつて来る。急いで来る男の姿である。あの方だらうか。

女は二三歩走り出した。「アルフレットさんですか。」

「マリイさんですね。」

待つてゐた醫學士が来たのである。女は嬉しさに泣きたくなつた。學士が側へ歩み寄つた時、女はその手に接吻をしようとした。

「どうなすつたのです。」

女は黙つて學士の手を取つて、引き摩るやうにして跡へ引き返した。

部屋の中では、フェリックスが暫く茫然としてゐたが、又起き上がった、あたりを見廻した。女はもう逃げて、自分一人になつてゐるのである。咽を締め付けられるやうな恐怖が襲つて来た。どうしてもあの女を側に引き付けて置かなくてはならないと思ふより外、なんにも考へて見る事が出来ない。一跳到寢臺から飛び出した。併し立つてゐる程の力がないので、又仰向けに寢臺の上に倒れた。頭の中ががんがん鳴つてゐる。又起き上がった椅子の背を掴んで、椅子を前へずらせなが

ら歩き出した。「マリイや。マリイや。己は一人では死なれない。女はどこへ行つたのだらう。行く所はない筈だが。かう思ひながら椅子を杖にして、いざりながら窓の側まで来た。庭が見える。蒸暑い晩の、青み掛かつた月の光が差してゐる。それが目の前にちらちらして、草や木が踊つてゐるやうである。ああ。これが己の體を直してくれる筈の、南の國の春であつた。この空氣だ。この空氣だ。こんな空氣がいつも己を吹いてゐれば、健康にならなくてはならない筈だと思つたのである。ああ。あれはなんだ。病人は地の底にあるやうに見える柵の格子のあたりから、青い月の光に照らされて、眞つ白に光る小

石の道を歩いて来る女の姿を見つけた。女は飛ぶやうに駆けて来る。次第に近くなる。マリイだ。マリイだ。併しその背後から男が来る。マリイと一しよに男が来る。恐ろしい大男のやうに見える。これまで見てゐる内に、柵の格子が踊つて来る。何もかも踊つて来る。遠方から歌のやうな物音が聞える。好い音だ。好い音だ。病人の目は昏んでしまつた。

マリイと學士とが駆け付けた。窓の所へ来て、女は立ち留まつて、恐る恐る部屋の中を覗いた。そして「あゝ、いらつしやいませんわ、寢臺はからつぼです」と叫んだ。

その跡で突然女はきやつと云つて倒れさうになつたので、學

士が抱き留めた。學士はそつと女の體を脇へ寄せて、自分か窓の中を覗いて見た。

部屋の中には、窓の直ぐ下に、白い襦袢一つを着て、フエリックスがばつたり倒れて、兩足を大きく擴げてゐる。片手はひつくり返つた椅子の背を握つてゐる。口の角から一筋の血が腮の方へ流れてゐる。唇と臉とが、まだびくびく動いてゐるらしい。併し好く見れば、それは月の光が青ざめた顔を照して人の目を惑はしてゐたのであつた。

明治四十五年七月一日印刷
明治四十五年七月五日發行
定價金壹圓

著者 森 林太郎

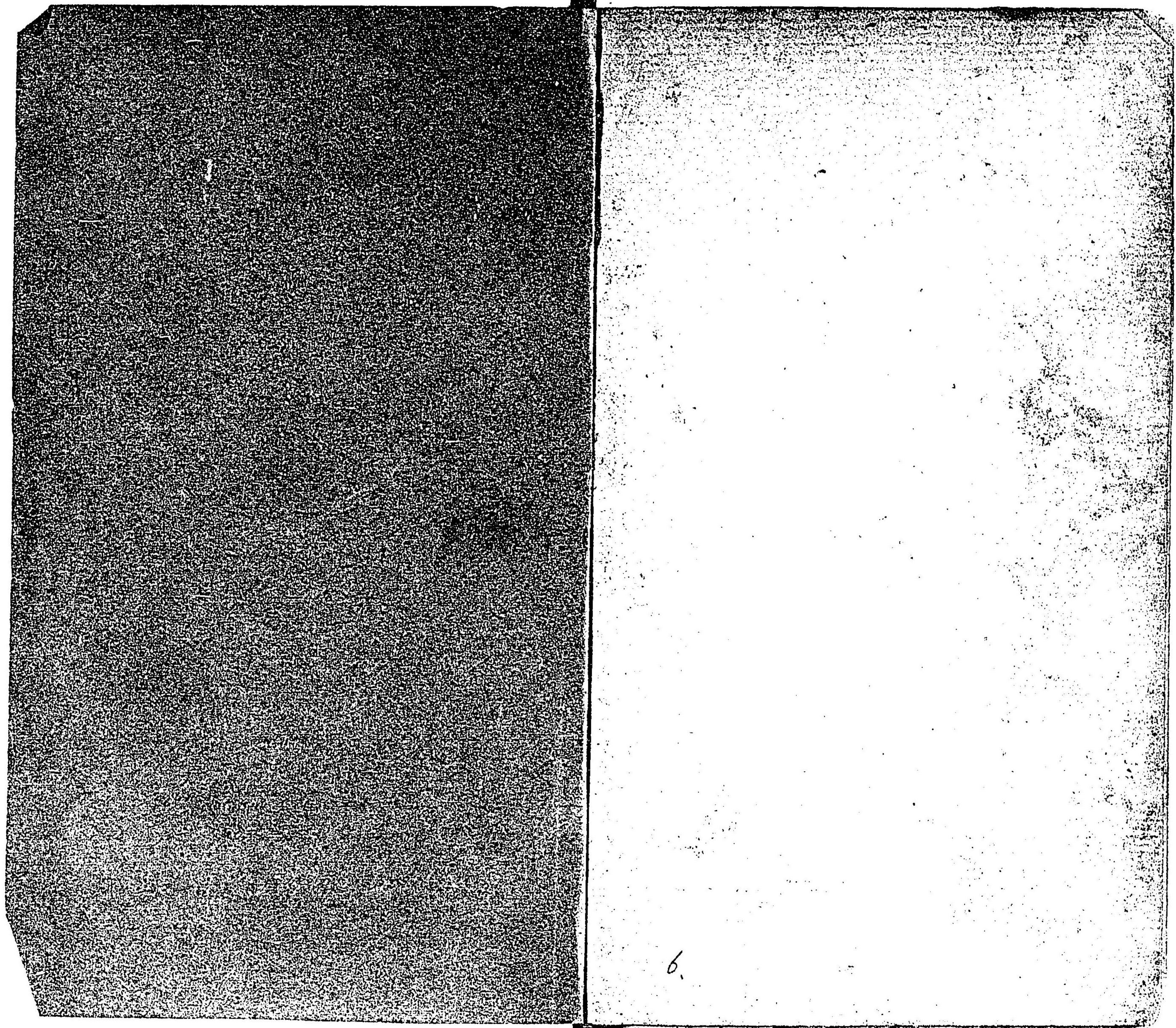
發行所 東京市東區馬場三丁目十五番地
秋山仁三郎

印刷所 東京市下谷區櫻木町四十番地
小松周助

印刷所 東京市東區芝罘町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

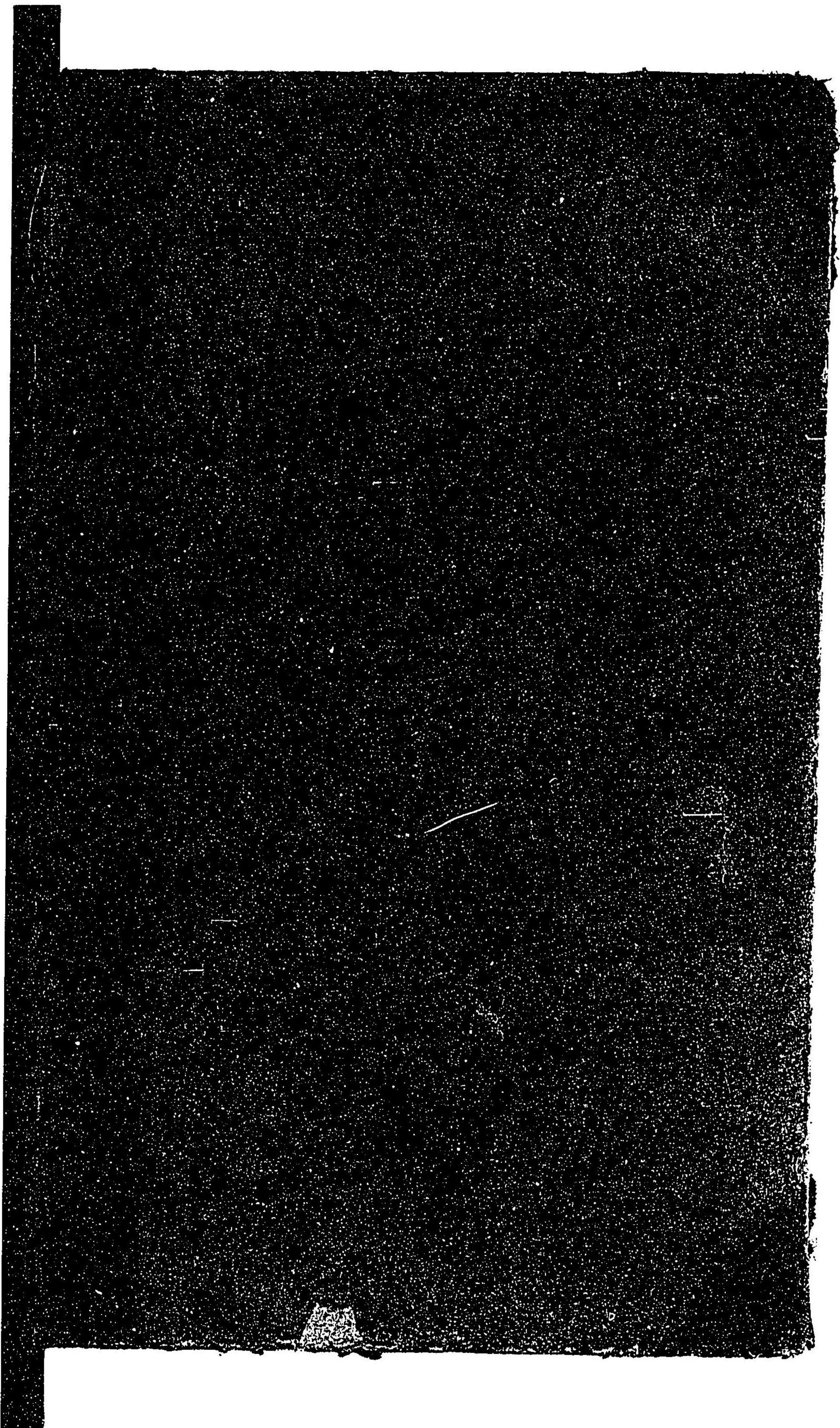
發行所 東京市東區馬場三丁目十五番地
秋山書店
振替貯金 東京二四一七番
大塚三六八六番





6.

151
93



35
93

101389-000-7

338-93

みれん

シュニツレル/著

M45

DBY-0722



